

インターカルチャー

INTERCULTURE

NO.65

1999年10月号
OCTOBER



■■ 学校法人 千里国際学園 Senri International School Foundation (SISF) ■■

千里国際学園中部・高等部 Senri International School (SIS)併設 大阪インターナショナルスクール Osaka International School (OIS)

〒562-0032 箕面市小野原西4丁目4番16号 TEL 0727-27-5050 FAX 0727-27-5055 URL <http://www.senri.ed.jp/>

オーストラリアホームステイ
豊富なサマーキャンプ
夏の海外研修報告
中2で英検一級合格
英語スピーチコンテスト相次ぎ入賞



撮影 斉藤 数(理科)

理想と空想

福田國彌
学園長

私達の心の中には、理想と空想が仲よく一緒に住んでいるようです。理想は、それを実現しようとする目的と結びついているようですが、空想は消えやすく実現することはあまり関係がないように思われます。

空想 *fantasy ; mental image*、幻想 *phantasm ; mental illusion : form without substance or reality*、夢想 *imagination as in a dream*・・・。3つの似通った日本語をOxford辞典を参照して英語で表わしてみました。幻想 *phantasm*には、*supposed vision of absent (living or dead) person* ともあり、幽霊にも関係しそうです。何はともあれ、以上3つの言葉を以下では「空想」で代表させることにしますが、空想は現実 *reality or being real* とは関係なさそうです。

しかしながら、21世紀はデジタル・マルチメディアの時代、デジタル技術が進んで、ヴィジュアル機器もオーディオ機器もデジタル、コンピュータによって空想は映像・音像コンテンツとなって容易には消えてしまわない。さらに、インターネットで各家庭のコンピュータを通して私たちの前に現前する。空想はもはや *virtual image* (光学の虚像) や *virtual reality* ではなく、コンテンツの作る現実の像となって社会を駆け廻る・・・。

昔から人類は理想郷 *utopia* を空想してきました。*utopia* という言葉自体は、再びOxford辞典をみると、Sir T. Moreが1516年に *imaginary land with perfect social & political system* として記述したとのこと。utopia は、完全な社会・政治体制という理想で彩られた空想の国ということでしょうか。浦島太郎の行った乙姫さまの龍宮城、桃花源記の桃源郷、Lost Horizonの Shangrila 等々、一度そこへ出かけることはできたが再び戻るこ

とができない・・・。そこは、理想と空想の交り合った非現実の世界のようです。理想は理性のなかに住み、空想は感性のなかに住む、といったように両者は截然と分離できないようですが、*utopia* へ、感性では容易に行くことができるが、理性では再びそこへ戻ることができないと言えるのかもしれませんが。21世紀のデジタル・マルチメディアの世界が、空想ばかり蔓延って、理性による抑制のきかない社会現象になっては大変だとも思います。

今一度考えてみると、理想と空想はお互いにはたらき合って人類社会の発展を促してきたようです。アルプスの山頂の雪を取ってきたいという空想を実現しようとして、da Vinci は鳥の翼の研究から飛行機の設計をしました。現在彼の理想は勿論実現されていますし、また多くの人たちの抱いた月世界旅行の空想すら宇宙飛行士月面着陸で実現しています。さらに、不老不死の空想もDNA組換え技術で可能となるのでしょうか・・・？

現代社会はこのように空想に刺戟されて実現される理想社会の方向に進んでいるようにみえますが、一方、環境汚染や生態系破壊のない自然のままの地球は、再びそこへ戻ることのできない空想になってしまったと思われる。また、Bio-technologyが、長い進化の過程を経て作られた人間存在を、たとえそれが *mortal* としても、再びそこへ戻ることのできないものとしてしまうことが起れば、悲しいことだと思います。

いま、わたしの理想の1つは、先生や生徒のみなさんと一緒に素晴らしい千里国際学園を作ることです。生徒のみなさんは、自由な空想と理想のなかから自分の未来の目的を作って勉強する・・・そして将来、

地球の自然と人間存在の作る *social & political system* が調和する21世紀の *utopia* を、*imaginary* から *real* に変換する作業に参加する・・・と、これがわたしの空想でないことを願っています。

私には今1つの理想があります。やがて何処かに隠棲して「五柳先生」のように暮らすことです。「先生はいづこの人なるかを知らず。また、その姓字を詳かにせず。宅辺に五柳樹あり。困って以てその号となす。閑静にして言少く、栄利を慕わず。書を読むことを好めども、甚だしくは解するを求めず。意に会うもの有る毎に、便ち欣然として食を忘る。性酒を嗜むも・・・」みなさんはいまお酒を飲んでばかりならん、成人になってからも飲みすぎず程々、生活を楽しくする程度にいたしましょう。

(註)

陶淵明(365～427)

歸去来兮辞、桃花源記、五柳先生傳などで有名、とくに夏目漱石が「草枕」のなかでその詩句「採菊東籬下 悠然見南山」を引用したことで一般に知られる。

私はこの後に続く詩句「山氣日夕佳 飛鳥相與還 此中有真意 欲辨已忘言」を愛する。

9月1日のこと

大迫弘和
SIS校長

9月1日、秋学期のスタートの朝、玄関から、生徒たちの歓声が聞こえてきます。「あ、今度の担任**先生だ！やったあ！！」「え、うそー、**ちゃんとクラス別々になっちゃたよ！」

今回8年生から11年生までは秋学期にクラス替えを行うことにしました。日本の学校の春の光景が本校では夏休み明けの朝に見られる事になったわけです。カリキュラム上の大きな工夫「学期完結制」をベースとして学級の編成時期も検討してきたわけですが、このクラス替え時期の変更が、よき結果を生むことを願っています。

その日、長浜に在住のとある方より一通の手紙が届きました。オーストラリアに所用で出掛けておられた時、ブリスベンでのホームステイを終えての帰国の途次シドニーを訪れていたSISの生徒と、たまたま出会われたとのこと。『シドニーで貴学園の生徒さんにお会いしました。明るく、さわやか、そしてマナーがよくて楽しい出会いであり、貴学園の校風が偲ばれました。』と書いてくださっていました。とても嬉しい手紙でした。

7月31日、関西空港に元気に戻ってきた9年生10年生のオーストラリアホームステイ参加者の一人一人の表情を、疲れの中にも成就の喜びをあふれさせていた、一人一人の表情を思い浮かべるのです。

「『オーストラリアに行かせてくれて、ありがとう。』それが娘の帰国の第一声でした」というお話をある保護者の方から伺いました。

生徒たちは、そのようにして、成長を遂げていくのだと、あらためて思うのです。

学びの場、としての学園は、日々

の学習を核とし知の力を育み、かつ、生徒の一人一人が「社会」とか「世界」とかいったものの中で確かに生きていくための力、例えばそれは「他者理解力」であり「共生力」であり、そのようなものを、家庭とは異なる環境の中で育み、また、生の基本となるであろう生活のリズム、形といったようなものを、これは家庭とのチームプレイで育てていく。

役割は、学園のそれは、そういうものだと考えます。

三木清風に言うならそれは「平生既知のもの、自明のもの」に「新たな感情をもつ」という意味に於いて「教育」なのだ。

180日という基礎部分を確実に押さえていく事を前提に、生徒たちには、ある意味「非日常」と呼ばれる環境の中で、「日常」の中では実現され得ない成長を遂げうる、そのような場が提供される事、学園の役割として、それは果たされるべきものと考えます。

違う言い方をするなら、時に人は解放される事が必要なのだ、そのようにして、かろうじて生き続けることができるのだ、とか、何も難しく考える事はない、友と過ごす非日常的な時間の掛け値なしの楽しさ、は多くの大人たちは「思い出」として知っているではないか、とか、様々なことばが、今回の私のメッセージの根拠として浮かんできたりします。

OIAからSISへの歴史の中で、生徒の疲労が色濃く見え「行事の整理」という取り組みがなされた事もありました。時間の流れの中、今、生徒たちに、ちょうどよい位の規模の「行事」が見えてきているように思います。

提供されるのがよいと思われるも

の、これまで生徒たちが、正に7月31日の閑空での表情が示していたように、心弾ませ、満たされ、彼らのよき部分が明らかに発現されそしてなにより彼らの成長を実現してきたような機会は、今後とも提供していこうと思います。

家庭—学校関係の中で、学校の役割範疇において、十全の責任を果たすものとして。

不参加の選択という、大切な権利を忘れないようにしつつ。

9月1日、秋の気配はまだ遠く、教室は蒸すような状態で始まった新学期、生徒一人一人の表情にあらゆる思いの根拠を置く、という当たり前のことに、彼らとの久しぶりの時間の中で、思い至る。

(注)本校では、中等部1年生～高等部3年生を、7年生～12年生とも呼びます。

本校は、1998年度より、それまでの4学期制から各学期同授業日数の3学期制(60日×3)へと移行しました。4月～6月を春学期、9月～11月を秋学期、12月～3月を冬学期と呼んでいます。

また1999年度には、大阪国際文化中学校・高等学校(OIA)から千里国際学園中等部・高等部(SIS)へ校名変更。同時に、中3以上の授業は一部を除いて「学期完結制」となり、高等部では学期ごとに単位が認定されるようになりました。このため、各学期で履修科目、時間割が変わります。

<夏の宿泊行事報告>

3 週間の貴重な思い出を胸に

オーストラリアホームステイ



中村亮介
社会科

今年のブリスベン地域は、例年になく雨の多い冬を迎えていました。日中の最高気温も20度前半と、昨年に比べると少し寒いような気がしました。

SISの9年生35名、10年生4名と私、木村、井嶋先生の3人の引率で7月10日から31日までの3週間3つの学校に分かれて今年はホームステイのプログラムを行いました。大きな怪我や、病気もなく皆それぞれがオーストラリアの良い思い出をつくって帰国したと思います。

一人で、しかも外国の知らない人の家に3週間もお世話になることなど初めての人も居たと思います。そして、しんどい思いもしたかと思いますが、それぞれが自分なりの考えや、方法でホストファミリーやバ

ディーの生徒達と過ごしたと思います。私は姉妹校のサンドゲート高校に行きましたが、他の2つの高校も訪問させてもらい、生徒の皆さんの様子を見たり現地の担当の先生と話をする機会を持ちました。3つの学校の担当の先生が異口同音言っていたことは、SISの生徒は皆明るく、非常にマナーが良く物事に対して前向きな姿勢があるということでした。訪問した2つの学校は初めての学校で、しかも日本の他の学校と姉妹校関係にある学校なのですが、1つの学校の担当の先生はその学校の生徒さんよりいい子達が多いと言ってくれました。嬉しいことです。

また、帰国前日はシドニーに1泊しましたが、空港まで出迎えてくれた日本人の添乗員の方からも皆のバ

スの中でのマナーや、話を聞く態度が今までお世話した学校の生徒たちの中で一番良かったといってくださいました。

さらに、帰りの飛行機の中でもJALの搭乗員の方からも生徒の皆の機内でのマナーの良さにお褒めの言葉を頂きました。学校外の、しかも多くの同じような団体のお世話をしている人達から、SISの生徒の皆さんへこのような言葉を頂けたというのは、長い間皆さんがそのような感覚やマナーを持ち得ていたからだと思います。ぜひ、これからもその良い部分を失わないように、家でも、学校でも色々な人に接して欲しいと思います。

今回のオーストラリアホームステイに行つての感想でした。

豊富な自然体験プログラムを満喫

自然体験キャンプ

田中 守
理科

32人のキャンパー（中部2年生と3年生）と23人のフォレストレンジャー（高校生ボランティア）が、今年も鳥取県日南町の呼子キャンプ場（Y M C A呼子高原センター）の大きな森を舞台に、たっぷりいろいろな経験をしてきました。レンジャーは7月2日にキャンプ場入り。前日の大雨で浸し泥だらけのテントなどの復旧作業から始まり、掃除・プログラムの準備・研修・打ち合わせと大忙しの2日間を過ごしました。そして7月4日。キャンパーが到着してよいよ本番。一気に森の中がにぎやかになります。今年新しく加わったプログラムは秘密基地（？）。天然のわき水の出る隠れ家、ツリーハウス、そしてインディアンテント・ティーピーを、テントサイトからちょっと離れた森の中に作りました。そしてこのキャンプのメインは、いろいろな自然体験のプログラムです。今年は「森林プログラム・草木染め・くんせい・ドラム缶風呂・野イチゴジャム・森のお菓子」から選んで参加できました。森の木を切りにいく森林プログラムは森林組合のおじさんが指導者ですが、ほかはもちろんすべてレンジャーが指導者。準備のための2日間で何度も何度も試したり練習して本番にのぞみました。どのプログラムも大成功でした。全員分の食事を作る当番もあります。夜は花火大会、きもだめし、そして最後の夜はキャンプファイヤー。満天の星もみんなで眺めました。

【キャンパーの感想文から】

■このキャンプは言葉で表せないほどの楽しさでいっぱいでした。キャンパー、レンジャー、先生方みんなで協力しあい、幸せに思いました。■私が一番楽しいと思ったプログラムは野いちごジャムです。みんなでひろって作って食べて...すごくおいしかったです！

■朝ごはんを食べた後、昼食作りにとりくみました。ぼくはその時初めて「50合」というすごい量のお米をはかって洗いました。（中略）家に帰ったらすぐ明るくてトイレにもすぐ行けて、何よりすぐ火がついたので、今まで気づかなかった便利さにおどろきました。■私はこのCAMPにきて、自然の中でも生活できるんだって思いました。びっくりしたのがバームクーヘンを作ったとき（森のお菓子）、あんなの自然の中でどうすればつくれるのか全然見当もつきませんでした。■一番感動したのは最後の夜に見た星空です。あれは本当に最高でした。流れ星を2つも見たんです。この出来事はきっと一生残っていると思います。（中略）でも私が本当に強調して言いたいのは、グループリーダーのゆかりちゃんや班の友達、レンジャーの人たちとおしゃべりをしたことです。全く知らなかった人と急に仲良くなれて、ご飯をいっしょに食べたり、笑ったり本当に楽しかったし、すごく感謝しています。■この4日間でレンジャーの高校生が大好きになりました。それに中2の中でもあまりしゃべらなかった人といっぱいしゃべれたし、このキャンプに参加して本当によかったです。さいごにG担（グループリーダー）のきょーちゃんは途中で体調が悪くなったのに、すごくがんばって、みんなに優しく、私の目標になりました。■今までのキャンプは必ずいくと決まっているようなものだった。でも今年からはいきたい人だけと聞いて、キャンプに行くという友達も減ってしまった。本当のことを言うと少し、いや、かなり私も迷った。（中略）キャンプから帰ってきた私の気持ち“ I am so glad I went.” ■リーダーというのは、すごく責任感もいるし体力もいるし、想像以上に大変な仕事だとわかった。それをやりとげたリーダー達は本当にすごいと

思うし、かっこいいと思う。

【レンジャーの感想文から】

■泥だらけになって、汗でびしょびしょになって、煙にいぶされながらでなくてはわからないものが確かにある■呼子のキャンプに参加して、自分がとても好きになった。■中部2年生って私には想像できないくらいすごいパワーを持っているんだなと感心してしまった。今回のキャンプで色んなことをたくさん彼らは教えてくれた。■レンジャーもキャンパーもみんなどこかで自分を支えてくれて、私も（みんなを）支えてきたキャンプだったと思う。■自分たちで作り上げるキャンプの良さを今回つくづく感じました。■自分なりに一生懸命がんばれば、その思いは伝わる。かならずね。■人が喜んでいるのを見て自分もあんなにうれしくなれるなんてはじめてだった。■今回のキャンプでわたしが得たものは「まだまだなんだ」という自覚だと思います。（中略）それで5日目には来年のリベンジを決心してました。1年でどれだけ成長できるか、わたしがのんびりを来年のキャンプでちゃんと見てくださいね。■スタッフミーティングの時言われた厳しい言葉、時間の大切さ、責任の重大さなど、こういう体験はすごく大事だと思う。■人の気持ちって本当につながっていくものなんだね。同じこと感じるものなんだ。そんな大事なことに気づかせてくれた呼子に心がいっぱいです。■レンジャーの働いてるときの顔、とてもかっこよかった。キャンパーと話してるときのレンジャーの顔、幸せそうだった。

みんな喜びにあふれてゴール

100キロWALK

見島直子
国語科

J R 堅田駅を出発してまもなく琵琶湖大橋を渡る。ここからは左手に琵琶湖を見ながらひたすら北上する。目指すは、日本海。福井県敦賀市、気比松原だ！

今回、100キロWALKにエントリーした20名は、全員がこのキャンプを第1希望に選んだ強者たち（高等部1年から女子2人、高等部2年から女子2名・男子15名。うち1名は、キャンプ直前の骨折のため、涙ながらに参加を断念した。無念じゃ）。その中には、昨年に引き続いて参加の「リピーター」もかなりいる。いったいこのキャンプの何が、彼・彼女らを引きつけるのか。興味深いところではある。ともあれ、目標は「完歩」。しかしながら、スピードや順位を競うものではない。お互いに励まし合い、助け合いながら全員ゴールすることが、究極の目標である。そうでなければ、100キロWALKが「キャンプ」プログラムのひとつである理由がない。

一方、同行する教員は4名。このキャンプを毎年サポートしている事務局の下村さんと田中憲三先生。そして今回が初めての馬場先生と見島である。我々は、サポート係（給水や食料の補給を担当）と、生徒係（コースの誘導と生徒の体調チェックを担当）に分かれて、2台の車に分乗する。見島は、生徒係りにまわり、行程の半分を生徒といっしょに歩き、残りは車に乗ってゆくことにする。

初日。朝9時の堅田は、曇り。風もちょうど良い程度にあって絶好のコンディションだ。メンバーたちは、琵琶湖大橋を一気に駆け下ったり、罰ゲームをしたりとエネルギー

を好きなだけ浪費しながらゆく。2人～5人の小さなグループに分かれ、好き勝手なペースで歩く。昼過ぎからは日差しも出てきたが、おおむね歩きやすい1日であった。この日の余裕を示す会話をひとつ紹介。

T「大阪・東京間が約500キロってことは、この100キロWALKを5回やったら、東京まで行けるってことやなあ」

N「私ら3日で100キロやから、15日で東京？」

M「それは、このペースで歩いたらの話やん。途中の休憩日もいれたら、20日はみなあかんのちゃう」

N「それにしても昔の人は、歩いたなあ」

H「江戸時代ね、江戸・赤穂は約650キロあったらしいけど、それを飛脚は3日で行ったらしいよ」

M「ええっ！本当にい？あつ、でもそれ、飛脚は交代してるよね」

今日の宿泊地は彦根市最南端にある琵琶湖コンファレンスセンター。広い大浴場が何より嬉しい。暮れなずむ夕日が、比良山系を茜色に染める。よし、明日も歩くぞ！

2日目。梅雨前線は南に下がり、真夏日となる。1日目の疲れが残っている上に、今日の行程は40キロ。いよいよ耐久レースの様相を呈するのだろうか。はたして午後からは、精神的にも肉体的にも疲れのピークに達する者が続出した。

生徒「先生、足いたい、もう死にそうや」

教員「本当に限界やと思ったら、



車に乗るんよ」

生徒「いやや、死んでも（！）乗らへん」

教員「・・・（それくらい言えるうちはまだ大丈夫やろけど）」

・・・一方で、自らの体調を冷静に判断して、少しの間、車に乗る決心をするメンバーがいたのも、この日の午後。その勇氣にも拍手。この日は最後の5キロになって、ようやく日差しが弱まり歩きやすくなる。湖岸に群生する葦が風に大きく波うつ。セピア色の日差しに包まれた湖は、近景にあじろ木、遠景に竹生島を配してうっとりする美しさであった。さて、2日目は、先頭集団と最後の集団の差が一番大きく開いた日でもあった。最後のグループがゴールした時、すでに入浴を済ませていた先頭集団のメンバー数人が、拍手や、トランペットの演奏で迎えた。今宵の宿泊地は、料理自慢の尾上荘。その豪華な夕食に舌鼓をうった後は、おのおの足の裏の豆をつぶしたり、マッサージをしたり、はたまたカラオケに興じたりして、それぞれ最終日への活力を養う。

3日目。朝から日差しが強い。昨日にも増して暑い暑い1日となりそう。今日は琵琶湖に別れを告げ、日本海を目指して山に入る。湖から

（次ページへつづく）

短かったけれど充実していました

生活体験キャンプ

野島大輔
社会科

今年は任意参加になったキャンプですが、生活体験キャンプ（箕面教学の森）は、7年生、8年生併せて38名が参加しました。1泊2日という例年よりも短い期間でしたが、ハイクとネイチャーゲーム、フリスビーとペタンクのプログラムを中心に、充実した時間を過ごせたと思います。バーベキューも全てのメニューで美味しく仕上がり、おかわり争いに殺到する姿が今年も見られました。

キャンプファイヤーでは宿泊ロッジごとの工夫による出し物が続々登場し、大学生のボランティア・リーダーの方々もたじたじでした。中でも、短い打ち合わせなのにグループでパントマイムをまとめた班には内閣総理大臣賞が出されました。上級生のリーダーが居ない今年でしたが、環境保護への配慮や就寝のマナーも良く、ここには8年生のリピーターの皆さんが力を発揮してく

れました。心配されていた大雨もなく、大きなケガ人も出ず、現地スタッフの皆さんはもちろん、食材を運んでくださったスーパーのおじさんや障害者共同作業所の皆さん、そしてスクールバスの運転手さんたちのご協力で、全てのプログラムを楽しく過ごすことが出来ました。

現地スタッフの方からは、「千里国際の生徒は、遊びながらルールを変えたり複雑にしたりしながらどんどん自主的に遊んでいくのが特徴ですね。初めはこちらの思いと離れていくので指導をされていて戸惑いましたが、段々それで良いと思うようになりました。」という主旨のコメントをいただきました。ご家庭や卒業生の読者の方々には、相変わらず型



にはまらない千里国際の生徒ならではのしやぎ方がおそらく直ぐに目に浮かばれることと思います。私たちの普段の教員としての感慨と重ねつつ、箕面教学の森の職員の方々の、理解の広さと度量の深さに今年も恐れ入った次第です。

（前ページのつづき）

の風もなく、暑さが一層からだにこたえる。皆、ひたすら歩く。黙々と修行僧のように歩く。午後。昨年の経験者もこの最後の行程がいちばんきついと言う。今まで小さなグループに分かれていたのが、自然と合流して2つの大きなグループにまとまった。後ろの集団は、疲れた子を真ん中に挟んで遅れないようにしたり、余力のある男子が、女子をひっぱる光景も見られた。その調子、その調子。みんな、がんばれっ！さて、この日の会話から。

教員「さあ、休憩！ エネルギー

補給にバナナ、食べる人は？」

K「下さい」

T「僕も」

教員「K君、今日それで何本目？」

K「10本です」

教員「・・・。T君は？」

T「バナナがこんなにうまいとは思わなかったあ・・・（人の話など聞いていない）」

S「先生、枝豆食いたい・・・（独り言?）」

長い長い道のりもついに終わりに近づき、いよいよゴールは目前！そ

の「ゴール」の瞬間にも様々なドラマが展開されたのでありました。たとえば、ゴールの横断幕目指してデッド・ヒートを見せたS君とF君。また、なんとゴール前10メートルで力尽きて倒れる、という迫真の演技をしたT君。またまた、完歩の感激に思わず涙したSさん・・・などなど。その表現方法にこそ違いはあれ、皆、喜びにあふれてゴール。皆、いい顔でした。横断幕を持って皆を迎えた私にも、なにやら胸にこみあげるものがありました。リピーターがいるのも、なんとなく理解できた気がします。よいキャンプでした。

生徒の目からみた農業キャンプ

国際交流農業キャンプ

真砂和典
理科

栃木県的那須にあるアジア学院での国際交流農業キャンプは私(真砂)にとって3年目になる。今年はキャンプ全体が自由参加の選択制になったため、まさか8人の定員を越えて実施できるとは、思ってもみなかった。しかし、ある先生に言わせると、この種のキャンプは一部に根強い人気(?)があるそうで、結局、高等部1年生9人が集まった。意識の高いその生徒達は、最初から最後まで私の指示を待つことなく、自ら進んで動いてくれた。その締めくくりとして、この文章も生徒に任せることにする。

農業キャンプの感想

前田信彦
高等部1年

最初ははっきり言って僕はあまり、このキャンプには参加したくなかった。何故かという、このキャンプに行ったことのある人達みんなが、「臭い、しんどい」と言っていたからである。こう聞いて「これは面白そうやでえ!」と思う人は少ないと思う。だから、「まあどこにも行かないのもつまらんから、無難に森のキャンプにしよう。」と思っていた。だがしかし、僕の某友人K君が、執拗に「農業いこーや! 前田っ!」とせまって来た。もちろん僕は、農業には行く気は無かったので、断りつづけた。しかし、彼は、僕を誘いつづけた。

「やっとなあきらめて帰ったか。」と思ったら、なんだか彼の後ろ姿が、とても悲しそうに見えた。そこで、僕はよく考えて見た。「森のキャンプかぁ、考えて見れば、絵、俳句なんて俺の性にはあわへんし、農業ってやっ

たこと無いし、やりがいは、ある。よしっ! いっちょ農業行っとくかっ!」こうして農業キャンプに行くことになったわけである。

こうして、農業に行くことになった僕だが、あまり何も気にせずに、キャンプの日が来た...

キャンプ当日。ついて見るとそこ(アジア学院と言う。ここにはたくさん外国の人達が農業を勉強するために来ていて、英語が共通語になっている。)は、僕の想像してたものと違い、とてもきれいな所だった。かわいい犬・猫もあり、過ごすには結構良い所だった。ついてすぐ、「うーさん」と言う好青年が僕達にアジア学院のきまり、スケジュールなどを説明してくれた。確か僕の記憶では、一日目から仕事をした。多分。しかし、これが結構楽しい。臭いけど。豚小屋のすぐ横で薪割り?(薪作り?)をした。こう言う仕事は案外好きなのでよかった。つかれて、宿舎に帰ると、全部自給自食なので料理組が料理をしていた。僕も餃子を手伝ったが、ちょっとまちがった料理法をしたがために、まズくってしまった。

「飯も食ったし、もう寝る時間。もう寝よう。ぐーぐー。むにゃ、や...やめろよー、むにゃ。」な...なんと、同じ部屋だった某友人Kが自分が眠れないがために、僕を起こしていたのだった。さ、最悪だ。

「さぁ、よく寝た、すがすがしい朝だ!」アジア学院の朝はNHKのラジオ体操と共に始まる。そのあと仕事をすの。だ。よって結構早起きである。同時に健康的である。

こうして同じように月日は流れた。(と言ってもちょっとだけね。)あるときはやぎの糞もった糞を取り、あるときはキャベツなどの野菜についた青虫や有害なテントウ虫を取り、あるときはサッカー、卓球なんかもした。こうして僕達は着々と、農業の楽しさ、重要さ、大変さを学び取っていったの



ある。

そして、アジア学院に農業を学びに来ている他の人達とも夜ご飯と一緒に食べ、交流しようとした。みんなウチの生徒は交流のためにばらばらの席に座ったのだが、何故か女子が座ったところに、男達が群がっている。恐るべし女パワー! きづいて見ると、僕とK君の所には誰もいなかった。どう言うことだろうか! まあ結局、人は来たが、一番遅れてからである...。そういう事もして、交流もちゃんとしていった。

そしてとうとう、終わりの日が来た。みんなに別れを告げた。その中で僕達は確実に農業を理解していた。農業それは一見、気ままそうに見える。しかし、それは違う! 農業は大変である! と言うのは、農業は地道な作業が多いからである。葉っぱについた虫取り、やぎの糞とり。動物にえさをやるだけでも大変である。それを毎日毎日、気を使いながら育てていくのである。その中で当然、動物、植物に愛着がわいたりするだろう。農業が無ければ、人間はどうなるだろう。飢え死にするのを待つだけである。それだけに楽しいと思うし、やりがいもあると思う。食べ物を自分で作ると言う大切さそれは計り知れないものだと思う。今回の農業体験キャンプで、食べ物は天からの授かりものであり、粗末にははいけないと思った。まずい、嫌いだから捨てる、いらん、などと言う考えはもっての他である。昔の人は「米一粒でも残したら目がつぶれる」と言ったのもよくわかった。今はもちろんご飯はキレイに食べている。

静かな自然の中で創作活動

柏原・坂越をたずねて

静かな森のキャンプ

斎藤 数
理科

【キャンプの概要】 4回目になる「静かな森のキャンプ」は、静かな自然の中で創作活動に専念できる場所、兵庫の柏原・坂越を選びました。引率は、短歌・俳句の指導を兼ねて国語の新庄先生、絵画は英語の山本先生、写真は理科の斎藤があたりました。柏原の宿泊施設は木々に囲まれた森の中にあり、鳥の声が聞こえ夕方には蛍が舞っている所です。初日は宿泊施設近辺での活動でした。2日目の活動場所は柏原の町です。町を歩くと、そこそこに古い城下町の名残りが染みついている、往時の武家や商家の面影を発見できます。町の観光課ボランティアの人をお願いして町の説明をしていただきました。町の人たちはとても親切で、学校帰りの高校生が町のことを話してくれたり、また、町のおもしろい場所などにもつれていってくれました。町の中心の小高い山には神社があり、恰好の創作活動の場を提供してくれました。生徒はゆっくりと町の空気を吸い歴史の流れを遡りながら、短歌を詠んだり、絵を描いたり、写真を撮ったりしました。3日目の坂越は、瀬戸内海に面しており、江戸時代は港町として栄えたところです。前日にもまして日差しのきつい日で、手入れのされた板塀や酒蔵の白壁などが海風を受けながら強光のもととても眩しく光っていました。あるグループは山の中腹にある神社境内の休憩所で、港の見える丘の東屋で、またあるグループは通り裏側のくねくね道の木陰で、思い思いの場所で涼を取りながらの創作活動でした。やや曇りの夏日もありましたが、宿舎への行き帰りなど車に乗らずに野辺の道を三々五々ゆったりと歩いたこと、夜のスイカ割りや花火《小》会、野外でのBBQ、しゃれた山小屋レストランで食べた幼稚園児用のお子様ディナー（我が団体をこともあろうに幼稚園児と思って準備したとのこと）また、男子のログハウスに真夜中に幽霊が出、その騒動以降朝まで1つのベッドに仲良く男子が2人ずつ寝たということ、などなど、創作活動



のほかにも、たくさんの思い出ができました。最終日の4日目は、学校に集まり印刷・製本関係の作業をしました。

【思い思いの感想】 創作活動の作品は1冊の本となって図書館においてありますので、どうぞご覧下さい。以下のスペースで感想を載せます。

「とてもゆったり落ち着き、どの子もいい顔をしていましたね。みんな新鮮な感覚で、目の付け所がとても良く、上々の出来栄でした」「今回のキャンプは、何かホノボノしていて、とてもよかった。友情も深まったし、大切なことも再確認できた」「こんな楽しいキャンプに参加できて本当に良かったです」「いっぱい絵も描けたし、自然をいっぱい味わった」「日本にもまだあんなに緑が残っているんですね。また行きたいです」「今回のキャンプは、なんだかのんびりできた。残念だったことは、海が思っていたほどキレイじゃなかったこと」「最初は、あの田舎さにビックリしたけど、静かでいいところだった」「きれいな景色見れて最高」「優雅なキャンプと思ってたらメッチャ歩いた。パーベキューうま！この3日間、暑い大阪を離れてRelaxできてよかった」「なんか、下町でジモティ（注・地元のティーネージャーのこと）と会って新鮮だった。かぞえきれないほど、一瞬一瞬に思いが詰まっている」「久々に森の中でゆっくりできて 大阪にいたら忙しさや車の音、アスファルトなどで気が付かない音や、小さい生命を感じたとき、すごく昔の子供時代を思

い出しました。感じたことをすぐに歌にできて楽しかったです。生まれてはじめて作った歌でした」「自由な時間がいっぱいあっていろいろできたので、楽しかったです。1日がものすごく早く過ぎていったようでした」「リラックスしてゆったりすることによって、いろいろなことを頭で考え普段とはちがう考え方などができた」「今までの中で、一番歩き、一番遊び、一番楽しかったキャンプでした。でも歩いたわりには体重へってなかった」「忙しくもなく、休みながら楽しく過ごせたので良かったです」「ごはんもいつも以上に食べて、真剣に短歌や俳句を作れて新鮮だった。思ったこともスラスラとかけた。ボーッとしてる時、山から風が冷たくて気持ち良かったです。本当に最高のCampだった」「田舎の人はみんな親近感のわくような優しい人たちばかりだった。本気で田舎に住みたくなった」「沢山歩いたから足が痛くなったし大変だったけど、その分おもしろいことも沢山あった。町の人は優しく感動した。しゃべりかけてくれたり、手を振ってくれたり」「キャンプ中ずっと歩きながら『暑い』『しんどい』を連発してました。でも友達とゆっくり歩きながら話したのは楽しかったです。普段ない発見が沢山ありました。カメラのファインダー越しに見た景色は、なかなか良いものでした。このキャンプでは、普段では決してみることでできない自然に触れられたことと、たくさん友達としゃべれたことが本当にいい思い出になりました」「話したことのない人と話したり、地元の人々に会ったりしたので、もし来年もキャンプがあったら皆にこのキャンプをおすすめします」「普段見れないものを見て、普段できないことをして、1週間分位の3日間だった。4日分人生得した気分」「身近な芸術への愛をとり戻せたのもよかった」

暑かったけれど、楽しい3日間でした。出来上がった文芸帳、大切にしてください。

少人数で充実

チャレンジキャンプ

新見真人
理科

今年のチャレンジキャンプも過去2年間と同様に兵庫県村岡町を中心に日本アウトワード・バウンド協会の指導のもとに行なわれました。参加者がわずか5名だったにもかかわらず、例年通り、いやこれまで以上に増して大胆ではあるが慎重かつ適切なプログラム運営を2名(+ 1名の女性補助指導員)の非常に親しみ易く優秀なインストラクターの、ハマヤンとナッツ、が担当してくれました。

今回は雨の影響をまともに受け、生徒たちにとっては、よりチャレンジングな3泊4日となり、このプログラムをやり遂げた充実感や達成感も大きいことと思います。ここでの貴重な体験がこれからの生徒たちの将来に対する大きな自信にきつとつながってくれることと確信しています。

以下に参加生徒の感想文を載せます。

“助け合い”と“協力”

長みさき
中部部3年

私はチャレンジキャンプに行って“助け合い”という大切な言葉の意味を教えてもらいました。最初は5人だけで行くと聞いて“ラッキー、人数が少ない方がいいや”と思いキャンプに行くのを楽しみにしていました。いよいよキャンプに行く日が来て、バスに乗りワイワイしているうちに目的地に着きました。すぐに“壁登り”や“70メートル下をロープだけで降りたり”とここでしか味わえない体験をしました。自分はここで死ぬかも知れないと思った時もありました。とにかく恐かったです。この時はあまり“助け合

い”というのはなかったけど、次の日の“沢登り”の時はその言葉がなければ死んでいたか流されていたかどちらかだと思います。桃子がケガをして女子が一人になった私は“沢登り”で一番とろくて、一番よく流された人です。そんな私でもみんなは手をかしてくれたり、声をかけてくれたりといろいろな事をしてくれました。みんな自分の事で一杯なのにいろいろドジをしている私を助けてくれました。それで無事スタッフ合わせて6人でゴールが出来ました。その時はいままでの苦労がうそのようにふっとんで心の中でただ“うれしい”という言葉だけがひびきました。そして私がゴール出来たのはみんながいくら遅くても待っていてくれて、助けてくれたからだと思います。その後、“バイク”や“いかだ作り”などもしましたが私にとって“沢登り”が一番印象に残りました。それは一番“助け合い”や“協力”というものを感じたからです。チャレンジキャンプはゴールにたどりつくだけではなく、“助け合い”や“協力”といったものが一緒に混ざって初めてチャレンジキャンプになると思います。私は5人でキャンプが出来て良かったです。

人生のチャレンジ

久保智之
高等部1年

まさか高校生が、自分一人だと思わなかった。そのため僕は前日まで不



安がおさまらなかった。もちろん、これは高校生として他のみんなをリードしていけるかどうかという不安だ。しかし、その不安もチャレンジという凶器によって切り裂かれた。そう、まさにこの4日間は危険との闘いだった。

一日目、危険度2。城壁クライミングもアブセILINGも甘く見すぎていた。まさにチャレンジというものが、こんなにも大変だということを一日から思い知らされた。また、その精神で、これほどの力が出せるということもこの時はじめて痛感した。

二日目、危険度3。沢登りはいかに協力し合って登りきるかが問われる。そして常に危険との隣合わせで前進していかなければならない。僕は途中で水の驚異と自然の偉大さを自分の体で感じる事が出来た。それだけに、この日の達成感は言葉では言い表せないほど大きかった。

三日目、危険度4。危険といってもこの日は体力的ではなく、精神的に辛かった。数百mもの高さをもつ山道や車道を走るMTB(マウンテンバイク)ツーリングは、一度諦めるともう進めない。こうなるとツーリングどころではない。それでもひたすら足を動かし続けて到達した時の自分の胸中は、満足感でいっぱいだった。

四日目、危険度1。協力と団結とを
(次ページへつづく)

写真でつづる心の旅

心の旅

青山比呂乃
図書館

「心の旅」では、高野山のお寺で修行を体験。今回は多くの写真でその様子を伝えたいと思います。



奥の院散策



朝、護摩をたいた後のおまいり



般若心経を写経



朝食前、阿字観で瞑想



作務(そうじ)

(前ページのつづき)

最も必要とするいかだも、この三日間でのチャレンジのおかげか実にスムーズに作り、乗り、川を下ることが出来た。そしてチャレンジする事の楽しさが、その時身にしみてわかった。

いざ、このように四日間を振り返ってみると、このチャレンジキャンプが人生そのものに例えることが出来るのではないだろうか。そう考えるといかにチャレンジが大切なことなのかわかってくる。最後に、心優しく指導してくださったナッツとハマヤンそして陰からこっそり支えて下さった新見先生に心から感謝したい。

終わらないでほしいと願った

堀 桃子
中等部3年

3泊4日の5人だけのキャンプは一言でいうと『最高』でした。5人だけという少人数だったので、毎日ずっと

一緒にいるとそれが当たり前になって、キャンプが終わらないでほしいと願ったりするくらいでした。すごく楽しくて、時間が経つのなんていつも忘れていました。

実は私は第1日目に指にケガをして2日目はみんなと第2のチャレンジが出来ませんでした。ただあとのチャレンジは全部やっちゃいました。これもスクールの人達の支えがあったからだと思います。チャレンジも楽しかったけど夜は特別楽しかったです。恋話はもちろん、女子のテントに5人全員入って恐い話をしたり、秘密をばらしあったり、なんだかどんどんエスカレートして“口外は絶対だめ”とみんなで約束しました。どんな話をしたかは丸秘です！気になりますか？

ごはんの時、昼はチャレンジしてる所で食べるけれど、朝と晩ごはんは女子(桃子とみさき)が2人で作って男子が後片づけと勝手に気づいたら決まっていました。でも、朝ごはんぎり

ぎりまで私達が寝ていたら全部男子がやってくれていました。そんな色々な事がありながら毎日が本当に幸せでした。ひとつひとつが初めてで(料理もみんなに期待ばかりされて、みさきとすごくあせったし)でも楽しくってなんか夢のような4日間でした。チャレンジの内容を書かなかったのは次の年チャレンジキャンプに行く人達のお楽しみ。すっごく楽しいよー。絶対一生忘れられなくなる。そのくらい楽しいよ。現に私達5人の中に1人高校1年の人がいて、会うのも話すのも初めてだったのに、今はあだ名でよびあっています。なんかそういうのってやっぱりいいと思います。みんなにもこの幸せをわかってもらいたいです！後悔なんてしないよ。楽しくて楽しくて夢みたいだよ。そして毎晩のチャレンジした後の温泉は最高だよ。汗を流し合おう！

来年、君はチャレンジする？

教職員異動のお知らせ

< 新任 >

< 退任 >



田浦秀幸
英語科

約7年半お世話になりました千里国際学園を8月末日をもって退職することになりました。

9年間公立高校で教えていた者にとって、当時（開校2年目）のOIA（現SIS）は夏のぎらぎら輝く太陽のようなエネルギーに満ちあふれた場所に映りました。立ち止まることなく、毎日毎日猛進している大きな流れに、溺れないよう必死でついていこうとしていたように記憶しています。きっと同じような体験をみなさんも本校入学当時にされたことだと思います。私にとって特に強烈に映ったのは、生徒一人一人の顔がはっきりと見える（言い換えると、個性豊かで伸び伸びとしている）点、大人の社会でも大切な5つのrespectを校則としている点、それと日本人英語教員にとって英語圏からの帰国生徒への英語指導の難しさでした。この最後の点が、退職し大学院で勉強したいと思い、更に今回大学レベルで研究を進めたいと思う直接の動機になりました。結果的に本校での教鞭の経験は、自身の視野を広げ人生を別の方向に導いてくれた貴重なものになりました。その過程で、授業や様々な学校活動の中で示唆を与えてくれた同僚や生徒、保護者のみなさんに深く感謝をいたします。

この秋から本格的にOISとのジョイントカレンダー、学期完結型授業、9月ホームルーム編成が始まり、かえって来年3月に退職するよりも迷惑をかけなくて済む時期だと思えました。と言っても、日本的な「学年度」観からするといかにも中途半端な時期での退職となり、特に受験期を控え微力なりとも力を貸したいと思っていた高等部3年生には非常に申し訳なく思います。私にできることでしたら遠慮なく連絡して下さい（e-mail:PDF02662@nifty.ne.jp）。できるだけ力になるつもりでいますので。

中等部3年生のみなさん、入学以来ずっと成長を近くで見させてもらいましたが、「千里国際学園の生徒であることの意義」がわかりかけてきた人の方が多くなってきましたね。嬉しく思います。自由であることの本当の良さを活かし、自分の良さが最大限に伸ばせる学園生活を送って下さい。保護者の皆様、私なりに精一杯取り組んできましたが、力が足らず様々な場面でご迷惑をおかけしたことだと思います。新見先生に学年を引き継げるまで持ってこれたのも、ひとえに私を常にサポートして頂いた保護者の方々のお陰です。ありがとうございました。

退職いたしますが、今後は私を育ててくれた学園に対し、インターカルチャの紙面を通して恩返しをしていきたいと思っています。具体的には、千里国際学園の一般生徒・帰国生徒の英語力の推移や、子供をバイリンガルに育てる上でのヒント等少しずつ記事にしていこう予定でいます。

益々学園が発展していくことを陰ながら応援し、私なりに微力を尽くそうと思っていますので、今後ともよろしくお願いします。



井藤真由美
英語科

週2日、1学期間（9月～11月）という短い期間ではありますが、以前より注目していたここSISに勤務する機会を与えられ、とても光栄に思っています。

公立高校で10年勤めて退職して以来、7年ぶりでの4月より再び教える側になりましたが、教える楽しさを再認識するとともに、この7年間で自分にとってのブランクではなく、有意義な時間であったということも実感しています。

その間の5年半は、夫の仕事の関係で、アメリカに滞在していました。残念ながらミドルやハイスクールとは直接の接触がなかったのですが、子供たちの通う幼稚園、小学校では、いろいろ学ぶことができました。最も刺激を受けたことは、先生たちのプロ意識の高さでした。その秘訣を盗むため時間を作っては、ボランティアペアレントとして教室に忍び込んでいました。その成果が、(?)最後の1年間は子供たちに日本語の授業をする機会も与えていただき、楽しい思い出となりました。

また、自分が大学院生として勉強することで、学んだ内容がプラスになったことはもちろん、久しぶりに学生となって、学生の目から「教師」や「授業」について感じることもできました。

昨年帰国し、現在3人の子供たちは公立の小学校に通っています。この間、親も子も日本的なもののよさにしみじみ嬉しかったり、フラストレーションを感じたり...、とmixed

feelings を持って順応してきましたが、日本的なよさと、アメリカ的教育のよさを Mix した環境にありたいという思いが強くなります。

このような今の私の気持ちにぴったりのSISに短期間でもめぐり合えた、この幸運に感謝！です。どうぞよろしくお願いします。



中川真理子
生活科学科

はじめまして。生活科学科の中川真理子です。この9月からお世話になり始めてから、毎日がとても楽しく充実しています。生活科学はその名の通り、生活に密着した科目です。皆さんの毎日の生活に少しでも役立ち、快適に、便利に暮らせる知識と、そして未来に向けて自分自身を知るきっかけを提供していければと思います。色々未熟な点もあるかと思いますが、一生懸命頑張っていますので、どうぞよろしくお願いします。



奥本陽子
英語科

こんにちは。9月からしばらくの間お世話になる、英語科の奥本陽子です。私自身、千里国際学園と同じ

く帰国子女を受け入れている同志社国際高校を卒業していることもあって、初めてこの学校に来たときからとても懐かしい気持ちでいます。

一応(?) 帰国生とはいっても、英語はまったくだめで、友達がべらべら英語でしゃべってるのを羨ましく思いながらみていたことを思い出します。そんなことも含めて、これから少しずついろんなことを生徒の皆さんと話していけたらと思っています。

「先生」として教壇に立つのは初めてで、まだまだ教えるより教えられるほうが多いのではないかという状態ですが、自分なりに精いっぱいやりたいと思いますので、どうかよろしくお願いします。



川口倫子
コンピューター

皆さん、こんにちは！そして、はじめまして！9月よりパソコンのクラスを担当しています川口倫子と言います。たぶん、ほとんどの人が「倫子」ってどう読むんだろうと、「う～ん」って思ったことだと思うのですが……。正解は、「みちこ」と読みます。一つ勉強になったのでは？

自己紹介はこれくらいにして、何を話しましょうか？パソコンということで、PCにからんだ、私の趣味をお話しましょうか。今、担当しているコンピューターの授業、「I.T.2 (Information Technology 2)」というクラスはホームページを作成中です。私自身、個人的に運営しているホームページがあります。じゃあ、どういう内容かってことになりますよ

ね。

ライブハウスが好きでちょくちょく、出かけていきます。ライブを楽しむのも一つですが、もう一つは写真。バンドの写真を撮るのが好きで、一眼レフ片手にライブハウスに行っています。数あるバンドの中で、あるバンドさんのホームページを作っています。彼らの紹介を主に載せています。しかし、最近更新をサボり気味なので、内容が古いのですが、URLを一応、書いておきましょう。

<http://www.galaxy-express.com/cynthia/>

一応、BBSやチャットもあるので、ヒマな時は遊びに来て下さい。

以上、自己紹介をかねて、自分のホームページを宣伝してしまいました。ではこのくらいで……。よろしくお願いします。

<他に異動された方々>

退任

武田晴美 コンピューター
Denel Hilgendorf 図書館
Kathleen Royal OIS数学
Louise Gagner OIS小学部
Christine Hayes 保健体育

新任

Gregory Watt 図書館
(挨拶はP.35)
Paul Murray OIS数学
(紹介は63号P.30)
Madeline Hanks
OIS数学・理科
(紹介はP.32)
春日井志野 OIS日本語
(紹介はP.32)

<夏の海外研修報告>

海洋学者になった夏

植田奈穂子
高等部1年

TIP三週間の経験



学校が始まり、たくさんの先生方や友達が「TIPでの3週間はどうかだった。」と聞いてくれた。ところが私はただ一言、「すごく楽しかった」で済ませてしまった。伝えたいことがたくさんあったのに、うまく話せない。

印象に残ったこと、学んだこと、おもしろかったこと。3週間という間に多くの新しいことを体験しすぎて、頭がまだ混乱していて、何から話していいかわからない状態だったのだ。ここで伝えられるのも、TIPのほんの一場面すぎないが、TIPとはどんなものなのか参考になればと思う。

私が今回参加したコースは、デュークマリナラボ(Duke Marine Lab)の「行動生態学(Behavioral Ecology)」というものだった。このプログラムは、大学での海洋生物の研究生活を体験することだった。

1日目の午前中は水槽を洗ったり、きれいな海水をくむなどでつぶれた。午後からは、さっそく浜辺で生物の採集を行なった。私は、水が深い場所へは行きたくなかった。なぜなら、海水がにごっていたので足もとが見えず、怖かったからだ。しかしインストラクターと友達に「深い所で、引き網で魚をとって見たら」とさそわれて、こわごわ挑戦してみた。思ったより楽しかったが、網を水の中で引くことは、重いのでむずかしかった。結局、エビが一匹、小さな魚が二匹ほどとれただけだったが、私は満足していた。服のまま海水に入ることを、それからはいくおそれなくなった。海洋生物の研究者はやっぱりいいなあ、とそのとき思った。一日、室内で研究だけではなく、実験や観察で使う生物を自分で採集に行けるからだ。

ところが、研究者のつらい面もこの

1日目に体験した。実験室に帰って採った生物を水槽に入れた後、私たちはシャワーを浴びることもできないまま、海水でびしょぬれの服で、クーラーのきいた室内で2時間あまり講義を聴かされたのだ。かぜをひくかと思うほど寒かった。研究者には体力と気力があるなと思った。

およそ、このような流れで2週間は過ぎていった。フィールドワークは、潮のサイクルや生物の生活サイクルに応じて、朝に行くか昼間に行くかが決まった。中型の船に乗って、沖の生物や川の生物をとりに行くこともあった。そのとき始めて野性のイルカを見た。感動のあまりカメラを構えることさえ忘れていた。

3週間目にはファイナルプロジェクトというプログラムがあった。研究者なら、自分自身の研究結果を学会で発表する必要がある。マリナラボでも、最終日の前日にクライマックスとして、TIPの生徒たちが研究発表を5分間行なうシンポジウムが開かれる。そのための実験をして結果をまとめるのがファイナルプロジェクトである。私は、ダムゼルフィッシュという熱帯魚が、自分の領土(テリトリー)をめぐる争う行動を調べた。2匹のダムゼルフィッシュが入った小型の水槽に様々な物体を入れ、どの物体の回りにテリトリーをつくるかを観察した。何時間も何時間も熱帯魚を見て過ごした。やはり研究者には忍耐と根気がいると思った。

私のクラスメートたちは驚くほど多様なテーマで実験を行っていた。例えば、その一人は、カニのエサとして着色料で色をつけたツナを与え、カニがどの色に反応するかという実験を行なった。しかし、エサのツナが水に浮

くわ、着色料が水に溶け出すので、カニがおびえてしまい、ツナに近づくどころか水槽から逃げ出してしまったそう。本来の予測した結果を引き出すことには失敗したが、おもしろいことを見出したらしい。それは、カニが色のついた(青色だったそうだが)水におびえるということだった。

皆、シンポジウムが終わったときには、ホッとしていた。私は、発表の後に皆から「よくやったね」とほめられて、本当にうれしかった。努力したかいはあったと思った。

3週間のTIPの生活と、友達やインストラクターとの別れはつらかった。わかれるとき、友達と抱き合って泣いてしまったくらいだ。

これまでに経験したことがない「研究」の仕方を、私はTIPで身につけたと思う。ひとまわり成長した感じがする。以前より、自分に自信が持てるようになった。

TIPは、この千里国際学園だからこそ参加できるプログラムだ。「楽しんで、がんばっておいで。」と快く送り出してくれ、「どうだった!?参加してよかったね」と暖かく迎えてくれる先生方や友達がいるから、私はいろいろなことに挑戦できる。来年もぜひ参加したい。

(注) TIPとは、デューク大学が主催するの中高生のための才能開発プログラムのことで、主にアメリカの生徒が対象ですが、本学園からは開校以来毎年数名のSIS/OIS生が参加してきました。学問への興味と関心を高め、生徒間の交流を深めることを目的とする3週間の夏期集中講座です。

"Que onda?" 「最近どう？」

杉山美歌
高等部2年

カナダ"英語研修

私は、この夏カナダのピクトリアで行われた「Global College」というプログラムに参加した。これには、50人の生徒が参加していた。名前からして世界中から来ていると思っていた私は、これから1ヶ月間生活することになる寮に入ったとたん賑やかに聞こえてくるスペイン語（その時はスペイン語だということは知らなかったが）に「ん？ここは、カナダじゃなかったっけ？うちらって英語勉強しにきたんちゃうん？これは、何語？」と思った。このプログラムに参加したのは、メキシコ人がほとんどだったのだ。私たちが日本から来たことが分かったと彼女らは、「日本ってどこにあるの？」「どんな国？」と一気に質問してきた。中には、日本と中国は、同じ国だと思っていた子もいた。だけど私もメキシコのことは、ほとんど知らなかったたのでお互いにお互いの国のことを知らないという状態で1ヶ月のプログラムがスタートした。

最初の頃は、はっきりいって日本人で固まっていることが多かった。英語ができる子ばかりではなかったのが日本人だけでなく他の国の人たちも同じ国の人同士で固まってしまっていた。全く喋らなかったわけではないが表面的な付き合いで壁を感じていた。「なんかこのノリについていけない」と冷めてる自分が嫌だった。ここで1ヶ月もやっていく自信がなかったのだ。

だがプログラムが進むにつれ寮生活や朝早くからの授業にも慣れた頃、気がつく私たち、混ざっていた。私は、VeronicaとCecyというメキシコの子と仲良くなった。彼女らは、とても思いやりのある明るい子たちだった。夜、みんなで誰かの部屋に集まっているんだ話を話した。内容は、日本で友達と話すこととあまり変わらなかった。学校の話、音楽の話等。お互いの

国のこともよく話した。国や文化が違って共通の話で盛り上げられるのは、嬉しいことだった。

寮生活は、賑やかで毎日がpartyみたいだった。お互いの国のことを教えあったり、化粧をしてくれたり、映画を見たりした。毎日、夜遅くまで喋っていたので、授業は、眠くてつらいこともよくあった。

スペイン語もこの1ヶ月間でかなり覚えた気がする。メキシコ人がほとんどだったためスペイン語は、どこでも飛びかっていた。最初の方は、「英語を勉強しにきたんやから英語しゃべりいや」（私も人のこと言えないが...）とか文句タラタラだった。でもスペイン語を覚えるいいチャンスだと前向き



に考えるようにしたらいろいろと教えてくれた。一番覚えてることばは、「Que onda」。英語でいうと「What's up」、日本語だと「最近どう」みたいなかんじだ。この1ヶ月間私たちの口癖だった。深い意味は、全然ないが会うたび「Que onda」「Saikindou」と言いあった。

この1ヶ月間、自分とは、違う生活習慣やことばを持つ人たちと生活して戸惑ったことも多かったし、よく悩んだ。だけどそういう人たちとうまくやっていくことの楽しさを知ることができた。行ってよかった。

陶芸作品を祖父母にプレゼント

菅野あずみ
中等部2年

カナダ"英語研修

今回カナダへ行くまで海外生活をしたことの全くない私にとって、見るものすべてが珍しいものばかりでした。私は、ピアソンに行き初めて2人でセーリングをしました。30秒も乗らないうちに、冷たい海に落ちましたが。それに後、Hong Kongからきた子と2人でカヌーに乗りました。その日は、たまたま風がつよくて、風の吹く方向へと行っていたら帰れなくなって、すごく大変でした。その後は、うでがめっちゃくちゃ痛くなりました。セントマーガレツは、音楽中心のアクティビティーを楽しみました。リズム練習や歌を歌いました。モニターのひとで、音楽とピアノが上手なひとがいて、すごく楽しかったです。プログラムに参加していた人が皆明るくのが良かったからかもしれません。あと、



初めてしたことは、バッテリーです。自動の「ろくろ」で作った初めての作品は、祖父と祖母にプレゼントしました。

同時にこのプログラムに参加した田中美絵さん（中3）、太田雅子さん、太田浩之君（高2）の報告は次号に掲載します。

リトル・アドベンチャー アメリカホームステイ

成川由季
高等部3年

「あれが1人分の量？」シカゴに到着してRain Forest Cafeでお昼ご飯を食べた時、レストランに入って私達の一行が最初に口にした言葉がこれである。1人分の量の多さにも驚いたが、小さな子供までが彼らの体には大き過ぎる位のお皿からものを食べているのにはなお驚いた。森の中をイメージしたレストランの個性的な内装に加え、食べている最中に動物の鳴き声が流れたり、稲妻が光って雷が鳴ったり、という演出も客を飽きさせなかった。食べ物の量の多さや店の演出に留まらず、何もかもが日本の2～3倍のスケールを持つアメリカで見るもの全てに圧倒されながら私達のアメリカでの滞在がスタートした。店員さんとお客さんだけでなく、知らない人同士でもお互いの触れ合いを大切にすることも初日のアメリカで私に強い印象を与えた。

出会い

Johnson Professional社が主催するアメリカ（ウィスコンシン州）へのホームステイプログラム（題してリトル・アドベンチャー）に参加することになったのは、朝のホームルームの時間に担任の田中憲三先生が紹介して下さったあるパンフレットを見たのがきっかけだった。「アメリカでやりたいこととその理由」という題で小論文を書いて応募し、その後面接審査を経て最終的にアメリカへ行くことが決まった。面接試験は横浜にある本社で行われた。私達日本人のホームステイ先は、ウィスコンシン州のフランクリン高校へ通う生徒達の家で、彼らの大半が日本語の授業を履修していた。7月半ばにはその高校の生徒が日本へ来ていたため、アメリカの地を踏む前に私達は横浜の本社で初めて彼らと対面した。

全国からは私を含め5名の高校生がこのプログラムに参加したのだが、面接試験の時顔を合わせてからお互いす

ぐ打ち解けることができた。東京、神奈川、大阪、香川、熊本と皆出身地が違ったので、お互いの方言や地方の話を聞くだけでもおもしろかったし、それぞれアメリカへ行ってからの目標は違うにしても皆アメリカという国に興味がある点では同じだったので話しも合った。アメリカへの旅はこの4人の仲間がいてくれたおかげで二重に素晴らしいものとなったと思う。雄大な自然に囲まれた酪農の盛んなウィスコンシン州で心の暖かい人達に出会い、中身の濃い2週間を過ごすことができた。

以下ではアメリカで感じた沢山の鮮烈な印象の内の1つだけを記したいと思う。

戸惑い

アメリカに滞在して間もない頃、私が唯一不便に感じたことは日常生活で使われている計量単位が日本と違うことだった。買い物をしていても自分の靴の大きさがアメリカサイズで分からなかったり、体重計の単位がキロではなく、ポンドなので自分の体重がいまいち把握できなかったり、と少なからず不自由な思いをした。例えば、日本でグラム、キログラム、センチ、摂氏（Centigrade）が使われるのに対し、アメリカではオンス、ポンド、インチ、華氏（Fahrenheit）が使われている。ホストマザーが私に書いてくれた料理のレシピに1カップと記されていたが、その1カップも日本では200ccのことを指すが、アメリカでは8 fluid ozのことを指すそうだった。また、大さじ、小さじの分量も若干の違いがあるらしい。まさかそこまで単位の違いがあるとは思っていなかったので、はじめはとても驚いた。アメリカのヤード・ポンド法に関してある本で述べていることを簡単にまとめると...

「アメリカは世界のほとんどの国が



採用している計量方法に同調していない。アメリカも20年以上前にメートル法移行を施行したのだが、建国以来定着してきたヤード・ポンド法からなかなか脱却できないでいるのが実状だ。それがアメリカの輸出における停滞の原因の一つとなっているとも言われている。なぜメートル法移行がなかなか進まないのかというと、一つはアメリカでは他の国のように法律により移行を強制することはせず、実際のメートル法移行の決定は各分野の自主性に任せていることが原因と考えられる。更にアメリカの強力な経済と高い技術水準が逆にメートル化を遅らせていると考えられている。発展途上国やアメリカとの取り引きの多い国ではメートル化が進んでおり、アメリカでは今後メートル法移行への長い道程が続くと予想される。」

はじめの印象

アメリカ人がメートル法移行に断固反対している訳ではないのだが、やはり「強い経済力」や「自主性」というアメリカの誇れる部分が逆にアメリカを国際社会から一歩遅らせる原因になり得るというのも事実だろう。これから更に狭くなっていくであろう世界で多岐にわたる地球規模の問題を解決したり、お互いが交流をはかる際、よりスムーズに物事を運ぶには単位を統一する必要性も出てくるだろう。自分たちが普段使っている単位を異なった単位に変換してものごとを考えるのは簡単

なことではないし、コミュニケーションをとる上でも障害となることがある。

発見

そう感じていた一方で私は今回の旅を通して「郷に入りては郷に従え」という諺の持つ意味を実体験から学ぶことができた。アメリカで時が経つにつれ、単位の違いにも不思議と慣れていったし、最後にはその捉え方も変わった。何も日常生活を営む上で単位変換表を頭にインプットさせ、常に正確な単位を知る必要はないのである。ヤード・ポンドなどの単位と付き合うコツは大ざっぱに単位の違いをつかんでおくことだ。例えば、1ポンドは0.45キログラム、すなわち、ポンドの

値からキログラムに直すには、半分にすればよく、もっと正確にするならそれから1割を引けば良い。アメリカの日常では独自の単位が使われており、アメリカ人の友達も皆その単位を使って物事を考え、行動している。彼らと早く打ち解け、うまく付き合う為にはやはり私がいつまでも日本の単位に固執しては駄目で、その地域の暮らしに自分を慣らしていくことも大切なのである。また、単位の統一がそう簡単でないのは、単位がその地域の文化や風土を反映しているからでもあるということが分かった。ウィスコンシン州では夏といっても日本ほど蒸し暑くなく、摂氏25度といっても肌寒い位だ。だから、摂氏という単位に換算して必ずしも同じ基準で比較できるとは

限らないのだ。

最後に・・・

今回の旅では本当に色々なことを学んだ。将来この経験をどこかで必ず生かしたいし、この旅での出会いを一生大切にしたい。このような機会を与えてくれたJohnson Professional社にこの場を借りて改めて感謝の意を表したいと思う。また、来年も千里国際学園から参加を希望する生徒がいることを願っている。正直言ってこれほど価値ある経験ができる機会はめったにないと思う。

このプログラムに参加するに当たってお世話になった方々、本当にありがとうございました。

<ただいま留学中>

どこに行っても変わらない私の性格・・・

呂 秀慧

高等部2年

アメリカに着き、もうすぐで一ヶ月が経とうとするが、相変わらずはしゃぎまくる私の姿はアメリカでも自由の女神のように(?)成り立っています(-。-;)ゞ。

学校は8月21日から始まり12年(高校3年)に編入する事ができました。今では友達もたくさんで、日本での私と全く変わらずともだちの名前を叫んだり、おかしなことばかりしながらに不自由なく(言語をのぞいて)楽しく生活を送っています。授業制度はいろんな事が新しく、戸惑う事がけっこうあったのですが、見知らぬ人にでも気にせず話かけてしまう私の性格がかなり役に立ち、すぐになれる事ができました。学校を出ると、2本のでかい道路以外はすべて緑、緑、緑。かなり体に良さそうな環境に恵まれています。

一方、ホームステイにかかえず現われるホームシックは今のところ1日(飛行機の中)で済ませました。私にとってのホームシックは親に会いたいというのもあったけど、それよりも親ともっと一緒に

居ておけば良かったとか、もっと優しく接すればよかったという親への態度の後悔ばかりでした。デトロイトに着き乗り継ぎの飛行機を待っている時、突然の台風でもう2回乗り換えなくてはいけなくなり、そのことを伝えるために親に電話をかけた時、親がとても優しい声で私の名前を呼びかけてくれた時は、すまない気持ちでいっぱいになり、声がふるえないようにとこらえながら泣いていました(笑)。公衆電話で一人二ホンゴでしゃべっている時ほど孤独を感じる事はないですよ。(笑)

とまあこんな感じではじまったアメリカ生活。これからどんなことが起こるかわからないけど、いままでの色んな経験を生かして、また失敗してもそれをばねにして“ワンダーガール(^ ^)/”という名をアメリカに残して日本に戻りますのでそれまでみなさん元気でいてください!!

12年の特定の女性様。卒業式を楽しみにしててくださいっ(^。^)/

学年だより

● 中部部 1 年生

個性は自分が育てるもの

土佐礼子

理科

この 4 月、期待と不安の混じった思いでスタートした新しい学校生活。入学当初、校舎の一寸複雑な構造に戸惑っていたひとももうすっかり馴染んで、何年も居るくせに今だに迷ってしまう私なんかより、余程頼もしくなりました。3 組の皆には、4 月の意欲満々の時期に、この 1 年間の目標を考えてもらいました。「たくさん友達を作る。」「授業に積極的に参加する。」「毎日の練習で体力をつけてクラブ活動でがんばる。」など等、素直な表現でそれぞれの意気込みを伝えていました。これまでの成果はどうだったでしょうか。急ぐことはありません。もう一度目標を見直して、ゆっくり進んで行きましょう。

私は、中部部 1 年生を担当するのは初めてですが、ひとりひとり魅力ある個性の芽をのぞかせて、いい一学期にしてくれたので、またこれからが楽しみです。でもそんな人達が集まっても、それぞれの持ち味がうまく発揮できず、互いに衝突したり噛み合わなかったりすることもありますね。

SIS のパンフレットに「リーダーシップ」「生き生きとした個性」「友愛の心」の育成とあります。「リーダーシップ」「友愛」はさておき、そもそも「個性」って何なのでしょう。どうもこのところが曖昧なまま、一般に、個性の尊重だとか個性を育てるといふ言い回しが便利に言い古されてきたように思います。他に秀でた才能というふうに置き換えて解釈されているかも知れません。国語辞典を見てみましょ

う。「個性---個々の人や事物がおのずから持つ、他と区別される特性」とあります。ということは、個人がおのずから持つ個性を出していく時、それはいつも周囲の人にとっていいことばかりでないかも知れないわけです。その特性によっては、周りの人が、そして多分に自分自身も困ることにもなる。でもその同じ個性が、他の環境や状況によっては大いに力になってくれることもありえます。よしんば力になどならなくても、その特性と表裏をなす他の素晴らしい面を支えていて、その裏表で個性が形成されているように思います。都合のよい個性だけを磨いて、都合の悪いところは無くすなんてことは、できるはずがありません(もちろん、だからといって野放しでいいということではありませんね)。自分のも、他人のも、個性を大切にすることは、そのような一見不都合に見えることも、大きく捉えて長い目で見ようよ、というゆとりではないでしょうか。オット、今度は「ゆとり」って何？ と言うことになりますから、この辺で止めておきます。

一年生には、この 9 月から錦美文香さん、コーク太郎君、占部由里佳さん、池永真央さんの 4 名が加わりしました。52 名がそれぞれ自分の個性を自分なりに育てていって欲しいものです。

● 中部部 2 年生

「5 つのリスペクト」の授業

水口 香

英語科

8 年生(中部部 2 年生)はこの 9 月から、新たに「5 つのリスペク

ト」という道徳に相当する授業が加わりました。第 1 回講義の後、早速、大迫先生が出された課題「他人を大切にする」を実践するため、他のホームルームの生徒が私のホームルームの机を掃除させてほしいと尋ねてくれました。8 年生の皆さんはこれまでも小学校で道徳を学んだと思いますが、道徳のクラスは理解することが難しいと同時に、教師の側にとっても非常に教えることが難しい科目です。なぜならば、道徳というものは人々が意識的に「人として大切だ」ということをもとに成り立っているからです。人間が長期に渡るさまざまな社会経験から学んだ、「善い」と考えられること、「徳」となると信じられていることは、漠然と人々の意識の中にあって、それらを説明することが非常に難しいのです。そして、今日のように人びとの価値観がまちまちで、社会が相対的な性格を強める中、道徳とは何かということがますますはっきりしなくなってきました。そして、道徳的に善いと思われても社会で実践するには不可能なことも多くありますし、実践する際に感情のほうに優先されて、非道徳的なことも人として正しい行いと判断されることもあります。

哲学者の和辻哲郎は人を「間柄存在」といいました。人は人に囲まれて生きるものであり、他の人が存在するからこそ自らも存在しうると説きました。道徳を項目だけで学ぶだけでなく、なぜ道徳が必要なのかというということを原点から考えてみれば、道徳はわかりやすいのではないのでしょうか。そして、道徳授業のもう一つの目的は、皆さんが実践の場でさまざまな問題に直面したときに、道徳的に判断する力を身につけることです。今回大迫先生が開講された「5 つのリスペクト」の授業は、実践面に力をいれて、具体的で

わかりやすく構成されています。皆さんがこの授業で多くのことを学ぶことを期待しています。

● 中部部 3 年生

仲間の気持ちを大切に

新見眞人
理科

1999年秋と冬そして2000年春学期へと、これからのSIS中部部3年生後半から高等部1年生前半にかけての1年間、2組ストーリー先生、3組松島先生、1組新見の3人で担当していきます。9月編入生として新たに3名が加わりました。1組に星野佑子さん（OISより）、2組に小池絵理子さん（ミラノより）、3組に友井智香さん（シドニーより）です。この3人の新メンバーがなるべく早くSISでの学習や生活に慣れるように、みなさん協力して教えてあげたり、助けてあげたりしてください。また、2組に米国留学より帰国した桂翔夢くんが加わりました。さらに、この秋から転校あるいは留学のため5名の生徒たち（中嶋真愛さん、松浦有里さん、森阪綾乃さん、市川亜矢子さん、そして以前から留学中の青木涼香さん）が違った場所（国、都市、学校）での学習を始めています。新天地、新環境でのあなたたち5人の活躍を心から願い、中部部3年生の61名+3担任が陰ながら応援しています。

この1年間の学年目標として『学年あるいは学級の仲間の気持ちを察することができるようになる』を掲げたいと思います。みなさん、あなたがた一人一人がどのようなことをすれば、この目標を達成できるかを、どうかじっくり考えてください。そして、その考えを実行に移してみてください。あなたたちからの良い提案を期待しています。まずは、SIS/OIS運動会や学年旅行などを

通して学年としての団結力や一体感を築き上げましょう。卒業式とその後のパーティーも重要な行事となりますね。すばらしい企画を考えてください。私としても秋のサイクリングやハイキングやバーベキュー、冬のスケート、さらに春の新生（高等部1年生）歓迎「アイスブレイクキャンプ」など手軽にみんなで楽しめて仲良くなれる企画もどんどん立てていきたいと考えています。それでは、みんなが健康で仲良く活動的な一年となりますように！

● 高等部 1 年生

セルフコントロールとマナー

木村典子
国語科

9月から新しいクラスで出発しました。今までは3クラスでしたが4クラスとなり、各クラス一人ずつの編入生を迎えました。担任団も1組木村、2組中村先生、3組ブラウン先生、4組山本先生と少し変わりましたが、中村先生とブラウン先生が引き続いていて下さるので心強い限りです。4人の教師で学年全体を見ていきたいと思っています。

高一という集団は、あなた達にとって一つの小さな社会です。小さな社会の基礎固めをしっかりとすれば、少し大きな学校社会も順調なはず。学校社会がしっかりしていれば、もっと大きな社会に出た時もしっかりやっていけるでしょう。

この小さな社会で懸命に生きて下さい。自分の可能性を伸ばし、自分にとって一番ふさわしい生き方を探してみてください。そこには失敗もあるでしょう。落胆もあるでしょう。でも失敗をしてもやり直すことのできる場所が学校です。失敗を恐れず生きて下さい。大きな社会に羽ばたくために、学校で基礎固めをして下さい。

私は最初のLHRで、あなた達に「自己管理をする」と「マナーを守る」の2点を達成してほしいと訴えました。生きていく上でこの2点は大事なことでないでしょうか。セルフコントロールです。自分の欲望に押し流されず、今やるべきことをしっかりやっていくこと。でもそれが自分にとってどんなにしたいことでも人に迷惑をかけるようでは困ります。マナーを守って下さい。自分を見つめながら他人を尊重する。まさに5つのリスペクトです。

5つのリスペクトを守りながら有意義な高校生活を送って下さい。その時に助けが必要な時は遠慮なく声を掛けて下さい。喜んで手助けしたいと思っています。

千里国際学園基本方針

千里国際学園では、自分の行動に責任を持ち、よい人間関係を維持していく能力が、生徒各自に備わっていると信じます。この考えにもとづいて、次のような行動の目安がつくられています。

5つのリスペクト

< 5つの大切 >

自分を大切にする
他の人を大切にする
学習を大切にする
環境を大切にする
リーダーシップを大切にする

● 高等部 2 年生

はじめまして11年生

廣田文野
生活科学科

11年生（高等部2年生）のみなさん、はじめまして。廣田文野と申します。といっても、春からSISにお世話になっていたのので、12年生や9年生の一部の方とはすでに接しているのですが、このたび、SISで初めてこの学年の担任を持つことになった”はじめまして”なのです。

ところで、生徒から聞かれて返答に困る質問があります。「先生って僕のこと嫌いでしょ。」とか「先生でも嫌いな生徒がいるでしょ。」という質問です。うーん・・・自分でも教師になるまで抱いたことのなかった気持なのですが、私にとって生徒とは無条件に”愛してしまえる”対象なのです。もちろん、今日の○○はいやだったな・・・とか、○○のこういう部分は苦手だなと感じる時もあるし、教師として厳しい対応を必要とされる場合はそのようにしますが、決して”嫌い”とは違うように思えるのです。私と同じように考えている先生は多いんじゃないかなあ・・・とも思います。

これから、いろんな場面で接することがあるでしょう。是非是非、学年やクラスを問わず、恐れずに、気軽に声をかけて下さい。よろしくお願いします。

● 高等部 3 年生

新しい試みの中で

真砂和典
理科

今回の変革にあたり、仕上げの時期を迎える高等部3年生が混乱することなく、いや、むしろその利点を活かしてより良い学習環境を得られるように努力したつもりです。幾つかの点について現状報告をしたいと思います。

4月から始まった、授業が終われば早く下校できる高等部3年生だけの特権はどのように行使されているでしょうか。多い日は10人、少ない日は数人が、1時から3時頃に下校しています。平均して1割程度の者が1時間半ほど早く帰っていることになります。大半の生徒は空き時間を、図書館や進路情報室前での勉強に当てています。更に、池田先生に

面談をしてもらったり、9月からは入学願書の様々な書類を作るために、多くの先生方に相談をして走り回ったりしています。時間の使い方にめりはりが付き、欠席や遅刻が減った理由のひとつになっているように思います。

学期完結制での授業選択について。夏休み中に進路や受験科目を変更した人が少なからずいました。それに伴い秋学期の履修科目を変えた生徒が20名以上になりました。昨年までの1年単位の授業では考えられないことであり、これも十分に活用されているようです。

冬学期の授業について。昨年までは1月になると高校3年生は一律に自宅学習となっていました。今年から授業を取ることができるようになりました。何人かの生徒はすでに履修登録をしています。また、余裕ができたなら取りたいという者も多くなります。この学校には進学したり、社会に出たりした後にも役に立つ授業がたくさんありますから是非取ってほしいものです。

さて、この学年は生徒も教師も大変忙しい時期を迎えています。しかし、みんなが顔を揃えるのもあと数十日です。どうか気持ちよく日々が送れるよう、お互いに努力しましょう。

< 学年だより番外編 >

作文コンクールで3名が佳作入選

大修館書店主催「第4回大修館賞全国作文コンクール」で、本校の**大野由美子さん（高2）、梅谷美知子さん（高1）、小俣こずえさん（高1）**の3名が佳作に入選しました。

このコンクールには、全国から13214篇の応募があったそうで、

激戦の中から選ばれた貴重な受賞です。佳作入選者には、賞状と、副賞として特製テレホンカードが贈られました。

おめでとうございます。

話題 情報 連絡

中 2 で英検 1 級合格

本年度第 1 回英語検定試験の結果発表

トラスコット徳子
語学学習センター

本年度第 1 回英語検定試験各級の受験者数及び合格者数は次の通りです。

	受験者数	合格者数
1 級	14	2
準 1 級	30	9
2 級	39	17
準 2 級	13	8
3 級	4	3
4 級	2	2

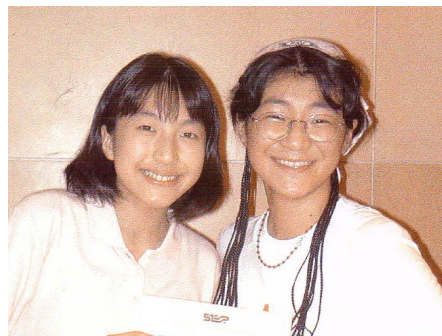
今回の 1 級合格者は、高等部 1 年 1 組の刺賀蘭理さんと中等部 2 年 2 組の今中由花子さんの 2 名でした。中 2 というのは、これまでインターカルチャで紹介した中での最年少ということになります。合格した皆さん、おめでとう！

第 2 回の一次試験は 10 月 17 日に、二次面接試験は 11 月 21 日にそれぞれ実施されます。この結果は 2 月号で

発表します。個人で申し込んだ人も是非合格の報告をして下さい。

ところで、当学園も二次面接試験の会場になっているのですが、今年から私がその実施委員をすることになりました。7 月 18 日（日）の試験に際し、準備の段階から色々とする事が多く、大事な試験だけに終了するまでとても緊張しました。今回も補助員のアルバイトを募集し 24 名が手伝ってくれたのですが、こちらで指示するまでもない位に皆それぞれの役割をしっかりと果たしてくれ、とても心強く頼もしく感じました。

11 月 21 日（日）の試験にもまた二十数名の補助員が必要となります。後日募集のお知らせを掲示板に貼り出しますので、興味のある人は気をつけて見ておいて下さい。尚この補助員には、今回英検を受験する人、及び 16 歳未満の人は申し込みません。



英検 1 級に合格した中等部 2 年今中由花子さん（左）と高等部 1 年刺賀蘭理さん（右）

■ 今月の詩

白い鳥

丸山 薫

顔にニキビが出来はじめて
誰からもけ者にされたと思ひ
またみづからものけ者になつた

はげしく内に怒り
けれど外はしづかに
どこに行つても独りぼっち！
ああ独りぼっち！

希望もゆめ理想も引き裂いて
砂漠か海へ行くほかはないと
まるで愛する女性を求めるやうに
美しい帆船の写真を探した

白鳥はかなしからずや
空の青海の青にも染まらずただよふ

祈つた
その真白い鳥となつて
わが十七歳を羽搏かうと
詩集『花の芯』より

（青山比呂乃・図書館）

英語スピーチコンテストに相次ぎ入賞

獨協大学全国英語スピーチコンテスト 3 位入賞 高等部 3 年野平志乃さん

PeterHeimer

SIS English

After winning in a qualifying round in Osaka, SIS 12th grader **Shino Nohira** took an all-expenses-paid trip to Tokyo on Saturday, September 11, to participate in the Dokkyo University All-Japan English Speech Contest.

Shino took third place and won a digital camera for herself, a DVD video player for the school, and some senbei for me. If you happen to see Shino, please congratulate her.

Also, please continue to encourage your students to enter a speech contest. There are several contests throughout the year for all age levels. An upcoming contest is the Kobe Mayor's Cup Bilingual Speech Contest - entry deadline is October 25th.



前列左から 3 人目が野平志乃さん (9 月 24 日付週刊 "Student Times" より)

兵庫県猪名川町英語スピーチコンテスト優勝 高等部 2 年小松麻美さん

高等部 2 年の小松麻美さんが、8 月 29 日に開催された、兵庫県「猪名川町英語スピーチコンテスト」の高校生の部で優勝し、副賞として来春、姉妹都市のオーストラリア・バラット市に約 10 日間ホームステイ派遣されることになりました。

小松さんは、「環境を守るために私がしていること」と題して、ドイツの環境問題への取り組みを実際に体験したことや、学校でエコロジーのクラブを作って学園祭で活動したことなど、約 5 分間、英語でスピーチをし、見事栄冠を射止めました。

なお、このコンテストの結果は 8 月 30 日付毎日新聞に掲載されました。おめでとうございます。

「新」新さんがきゅーから

卒業生からの便り

池田大介

進路情報室、社会科

さてさて、今回のお話は；

昨年度本校（旧OIA名称での最後の）卒業生、郭加奈さんが登場。生まれ故郷を離れ、学業修行に上京した彼女の「生」のお話を聞かせてもらいませう。

「OIAシックにかかった大学1年生の4月」

郭 加奈

第6期卒業生、慶應義塾大学1年

一学年最高75人（入学当初は30人）という環境で6年間過ごしてきた私には、300人収容サイズの教室が普通という大学生活は驚きの連続であった。

4月3日入学式、慶應義塾大学日吉キャンパスは人・人・人。一緒に入学式に出席したOIAの友達4人以外は全くの赤の他人。（おまけにほとんど東京弁。）入学式当日は新生、保護者、サークル勧誘のための先輩達で本当に人だらけだった。約100メートルの距離に行くのに、20分かったほどだ。

4月8日授業開始。大学生活初めての授業に出席。講義要綱を読んで興味を持った授業に出たものの、開始30分で早くも「大学ってこんななの？」ってはっきり言って失望した。教壇で先生がマイクを持ち、一人でひたすら話している。そこに生徒が授業に参加できる余地は全くない。一般教養の講義であるため、完璧な知識注入型の授業なのだ。OIAで参加獲得型の授業を6年間経験してきた私にとっては、はっきり言って物足りなかった。大学をけなしているわけではない。それだけOIAで学んできたことは高度なことだったのだ。入学したばかりで分からないことだらけの不安な大学生活、誰

も周りに頼れる友達・先生・先輩もあらず、おまけに授業さえもOIAの方が高度に見えてくる。OIAのみんなと一緒にいたい！OIAの方が大学より楽しい！できるものならOIAに戻りたいとホームシックではなく、OIAシックにかかった。他の大学にいるOIAの友達が少しでも大学生活をエンジョイしているのを聞くと羨み、逆に不平不満を訴えている友達を見つけると内心ほっとしたりもした。そのころの私には隣の花はなんでも赤く見えたほど、心に余裕がなかったのだ。そんなときでも結局力になってくれたのは6年間OIAで共に手を取り合ってきた友達だった。さすがに中・高という6年間と一緒に過ごしてきた友達は私のことをかなり理解してくれていて、逆に考えてみれば、こんな素晴らしい友達がいるということ、大学の授業を物足りないと思えるほどのOIAというベースがあるのだから大学でも頑張っていけるのではないかと感じられたのだ。それからの大学生活はどんどん楽しくなっていた。様々な人々との出会い（色々な地方から人々が集まっている。）、大学ならではの興味深い授業の発見、東京という新天地での生活、全てが自らの視野を広げていった。今は大学生という大人でもなければ、子供でもない不思議な立場を満喫しつつ、この限られた時間に感謝し、大切に過ごしている。

OIAにいる頃は、この学校はすごく特殊で小さな世界だから、学校外では通用しないのではないかといつも心配だった。でも、そうではなかったことに大学に入学してすぐに気づいた。OIAではテーマを選び、リサーチし、発表をし、レポートを書くということを「えー、またー！」と思えるぐらい当たり前に行っていたけれど、大学で

会うどの友達に聞いてもこんな事を中学・高校では経験したことがないらしい。知らない間に、そういった技術を身につけていたため、大学に入ってから困ることはなかった。また今夏、昨年スピーチコンテストで入賞した際の副賞としてオーストラリアへ40日間ホームステイへ行ってきたが、特に英語でのコミュニケーションにおいて困ったことはなかった。（参考までに私は帰国生ではありません。）オーストラリアでもhigh schoolの先生がジョークで現地の生徒（Gr.12）に“ She can speak English better than you. “なんて言ってくれたのもOIAのおかげだと思う。現に友達とゴールデンウィークに学校へ来た時、native English Speakerの先生に（彼らにとっては当たり前のように）英語でいつものスピードで話しかけられたときには、顔に？が出るほど聞き取れなかったり、もし聞き取れたとしてもスラスラと答えられない自分を目の当たりにしたときには本当にショックだった。在学中は普通にそれができていたのに（私のみならず多くの友達からも同じ意見を聞いた）。

今回オーストラリアにスピーチコンテスト入賞の副賞として行けたことも推薦入試で大学に合格できたこともOIA在学中に自分が一生懸命やってきたことを認めて下さったのだと思う。大して努力したというつもりはないけれどOIAでの日々の積み重ねは私にとって非常に大きな意味を持っていたのだろう。自分のやる気さえあれば、千里国際学園は何でもできる環境。ここにいられる時間を大切にしたいと思っています。（私もできるものなら戻ってきたいです。）

保健論文の取り組みを朝日新聞が紹介

岡田憲志
保健体育科

昨年12月に現12年生が取り組んだ保健論文が、7月2日付朝日新聞夕刊に取り上げられました。みなさんがご覧になっているこのインターカルチャは、ご存知の方もおられると思いますが、いくつかの新聞社、雑誌社や学校等にも配られています。朝日新聞の記者の方が、このインターカルチャに目を通し、この保健論文という取り組みに興味を持たれたのです。同新聞社の内屋敷記者が、抄録と論文集を読み、特に興味を持たれたものをピックアップし、その作者の生徒と本学の図書館で直接会って面接を持たれました。その結果が今回の記事です。

取り上げられたのは、中島花子さんの「出生前診断」、吉川千晴さんの「テレフォン・クラブ」、山野房道さんの「性同一性障害」、田中美帆さんの「高校生の男女のセックス観 & 世代のセックス観」、山村文子さん、中村友紀さん、古賀知子さんの「性」に関するアンケートを基にした論文でした。みなさんは高校3年生という忙しい時期にもかかわらず、時間を作って面接にのぞみ、論文作成時の苦労やこの過程で得たもの、などの話をしてくれました。一度、この記事もごらんになってみてください。

この9月からの新しいスケジュールにより、この「保健論文」の授業は、12年生の生活科学の授業の中に取り組みまれる予定です。当然タイトルも変わるでしょうが、クロス・オーバー・サブジェクト（教科を超えての共同の取り組み）としてやって行きたいと思っています。ご期待下さい。

今回の抄録は、池山朋子さんの「腎臓移植」です。2月に日本で初めての脳死患者からの臓器移植がおこなわれました。その後、続けて数例の脳死患者からの臓器移植もおこなわれました。この大阪は、臓器移植のメッカともいえます。この問題を考える際の参考になると思いますので、ぜひ、ご一読下さい。

腎臓移植の是非

池山 朋子

高等部3年

科学技術はすさまじい勢いで進歩していて、多くの不可能を可能にしている。一昔前までは呼吸が停止した時点を「死」と見ていたが、最近ではその呼吸すら人工的に管理できてしまう。医学の世界でも、臓器移植、延命治療、人工臓器の開発、遺伝子研究、体外受精、胎児診断・治療といったことが進み、倫理的、宗教的な問題にまで発展している。これらの中でも、以前から臓器移植の是非について興味があったので、今回のテーマにした。難解な問題で、正解がないのは承知の上だが、出来るだけ臓器移植の真の姿をとらえ、私なりの見解に辿り着きたいと思う。初めは臓器移植全般について調べるつもりでいたが、あまりの資料の膨大さにおののき、移植数の一番高い腎臓移植だけに焦点を当ててみることにした。

腎臓は、血液中に溜まった体の老廃物をこす働きをしている臓器だ。腎臓が悪くなると、老廃物の濾過ができず、体にそれが回って尿毒症になったり、骨折しやすくなったりし、最後は命に関わってくる。

腎臓機能を失った人には、透析という処置を行なう。透析とは、正常に機能しない腎臓内の不純物を体の外部で取り除く方法である。この透析の技術はだいが進歩してきたが、それでも週2～3日必要で、1回4～5時間かかり、そのため仕事をきちんとするのは難しい。ただし、かつてのように5年で死ぬということではなくなってきた。腎臓病で人工透析を受けている日本人は11万人いて、毎年8000人余り増えている。しかし、透析は病気の根本を治すことにはならず、患者は一生病気と闘わなくてはならないのだ。そこで最近では、腎臓移植が急速に普及している。

腎臓移植は、腎機能が失われた患

者に正常な機能を有する腎臓を移植し、その患者の腎機能を回復させる治療法である。腎臓移植には明るい面と暗い面の両方が存在する。明るい面の具体例を挙げると、経済上透析より負担が少なく済む、一般の人々が積極的に主役の一人として生命倫理をめぐる議論に参加する、移植を待つ患者が救われる、臓器が有効に利用される、などである。一方暗い面には、神聖な人体が素材や商品と同様に扱われる、動物の生体解剖がますます行われる、死者に対する尊敬が失われる、臓器の分配の不公平、術後の体調不全、臓器売買、などがある。特に臓器売買問題は深刻で、移植業界で名高いピッツバーグ大学のスターズル医学博士は、「胎児、脳死患者、霊安室の遺体、どこから取った人体の組織であろうと、その取り方と配分は、今後長年にわたって、生命倫理のあり方をめぐるホットな話題となるだろう。臓器移植が魔術から商売へと変わったとき、問題が起こった。」と言っている。これらと同時に、人間の心により所となる宗教による、臓器移植の受け止め方の差異も出てきている。

以上の腎臓移植の有用性や問題点を見てもらうと分かるが、腎臓移植の是非については是か非か結論を出すのは、非常に困難を極めるのである。しかし、移植は自然の摂理に反していて、不自然なのではないだろうか。他人の臓器を貰ってまで自分が長生きしたいと願うのは反倫理的なことで、それは醜い物乞い何ら変わりはない。早からずも死ぬかもしれない人の延命のために、生き返ることのない人から臓器が抜き取られ、移し換えられる。移植行為は全て密室の中で行われる。「遺族に遺体が引き渡された段階で、遺体に残された縫合跡の大きさに驚き、無惨

なことを許した罪悪感と、体内の何を取られたかも知る由もなく、その不安が遺族を苦しめる。」これ以上の苦痛があるだろうか。反倫理的という感情を証明してくれるかのように、レシピエントの体に他人の臓器が移植された途端、その臓器は、免疫反応という厳しい反撃をしてくる。人の各器官および各細胞には、その人ごとに固有の遺伝子情報が組み込まれている。そのためレシピエントは死ぬまで、他の情報を持った異物である臓器を排除しようとし、それに勝つための免疫抑制剤や副腎皮質ホルモンなどの副作用や感染症と闘う羽目になるのだ。

人間のあるべき姿というものから掛け離れてしまっている腎臓移植(臓器移植)と、それとは無縁でいられない臓器売買。移植の抱える問題は複雑で明確な解決策もないのなら、いっそ移植自体を廃止するべきではないか。英雄的な生命救助に惹かれる気持ち、また技術に対する尊敬の念があるのは分かるが、移植は余りにも多くの問題を含みすぎている。

歴史の授業で連歌に挑戦

広瀬三矢子
社会科

基礎社会（歴史）の時間に室町時代まで学びました。室町時代の文化といえば金閣寺や銀閣寺、能楽や茶道のはじまりなど、いろいろありますが、そのうちの一つに連歌があります。8年生（中等部2年生）が室町時代の人になりきって、当時流行の連歌に挑戦してみました。各自、指を折って、頭をひねりながら、60分で1組、2組とも二つの連歌をつくりました。そのうち自信作をご披露いたします。この一行は誰の作かななどと想像しながら楽しんでみてください。

連歌

中等部2年生（基礎社会クラス）

8年1組

夏祭り 虫除けスプレー めらなくちゃ
蚊にさされてもたたけばいいさ

どの店も 流れる音楽 宇多田ヒカル
金魚までもが歌っているよ
カタカタと夕暮れに響く げたの音
その音がゆく 夜店の並びに
いろいろな私の好きなものがある
妹が好きな おもちゃを買った
浴衣姿の 少年少女が 走ってく
背中のうちわ あさがお模様
例外の女子高生のは ジャニーズジュニア
それを取ろうと つまづく私
どんとんと ジュニアのうちわ 遠ざかる
夏祭りだね 夏祭りだよ
嬉しいな お面をかぶって かくれんぼ
見つからないわ まあいかなあ
つまんない もう僕帰る さようなら
私はここよ おいてかないで
たくさんの できごと 起こった 夏祭り
8年2組
青い空 青い海との わけめなし

夏の太陽 水面にうつり
今年こそは 特注してた ピキニ着て
夏を満喫 海の家にて
潮辛いいのちの源 海のブルー
海の家から 白い波見て
見てみれば 海の向こうはいい景色
と思いきや 人が溺れて
なんちゃって ボートにのって 沖へ出て
問題ないと 浜に戻った
砂浜を 一人青春 楽しいな
だけど一人じゃ むなしすぎます
わかれな 君がいないと だめなんだ
白いさざなみ キラキラ光る
とびこもう あなたの胸に 今すぐでも
期待してる 二人の夏
白い肌が 黒くなるまで 海にしよう
まっ黒くろで やきすぎだよ

スターシャインプロジェクトを読売新聞が紹介

新見真人
理科

NASA（米航空宇宙局）の呼びかけに応じた世界の児童・生徒が鏡を磨いて出来上がったミラーボールのように光る小型人工衛星「スターシャイン」が6月5日に宇宙に空間に放出されました。

保護者からの提案を機に、本校理科部を中心とした生徒達がこのプロジェクトに取り組んだ様子が、6月15日付読売新聞で紹介されました。

The New English Program

JoyKaplan

SIS English

I asked about 40 students in grades 9-12 to write down their observations and opinions about the new trimester English courses. Most of the students said that they are happier under the new system because they have freedom and many courses to choose from, they can take classes with their friends, they can work with students from different grades and different levels and make new friends, and they can improve their English by working with students of a higher level.

Our school is organized more like a university than a typical high school now, insofar as students have responsibility for designing their own educational program and making choices each trimester. Hopefully, the experience of self-selecting courses at S.I.S. will prepare students for the more complex choices they will have

to make once they enter university. English teachers made a video explaining the new courses for students to watch. We also spent time during English classes helping students navigate through the course selection manual in order to identify their choices. Some students said the video was helpful and they understood the new system, while others confessed that they are still confused. Of course a new system is confusing, but with time, students will adjust to the new system.

Some lower level students remarked that they suddenly have to work much harder in order to keep up with the class! Some also reported that they feel shy to speak in front of higher level students. At the same time, some higher level students complained that the level of English being used in class

is too low. (Teachers are now faced with the challenge of tailoring materials and activities to be appropriate for different levels within the same class! The new system requires a new kind of teaching, and teachers will need time to adjust to the new system as well.) However, these same comments were sometimes made before we adopted the new trimester system, because our classes have always included a mix of levels, as our students hail from such diverse backgrounds. Overall, students expressed satisfaction with their new courses, and we hope that as the new system evolves, all will be satisfied.

海外帰国生 紹介

入学センター

中等部

学年	氏名	滞在国内
7	錦美文香	アメリカ
7	池永真央	アメリカ
7	占部友里佳	タイ
7	コーク太郎	O I S
8	賀茂良穂	アメリカ
8	堺谷詩織	イギリス
8	村上 慧	ドイツ
8	野村 岬	アメリカ
8	小川佳泰	アメリカ
8	松尾知洋	香港
9	星野佑子	O I S
9	友井智香	オーストラリア
9	小池絵理子	イタリア

高等部

学年	氏名	滞在国内
10	嶺崎隼人	イギリス
10	上島由美子	オーストラリア
10	吉川龍拓	アメリカ
10	成瀬修平	ドイツ
11	山本香織	インドネシア
11	岡 桃子	フィリピン
12	大崎桐子	イギリス
12	栗波有子	台湾
12	三宅由雅子	香港

正式に活動を始めました HS生徒会執行部

鄭 有雅

HS生徒会書記、高等部2年

この9月から正式に、新HS生徒会執行部が活動を始めました。研修期間という事で、一応5月から前生徒会執行部と一緒に学園祭の仕事をしていました。そして、生徒会執行部が新しいメンバーになって初めての仕事は、6月30日(水)に行った「そうじの日」です。学校には、いつも掃除をしてくださっているサービス業者の方々がいますが、その人達の手が回らない程、校内の施設を汚す又は、壊す人がいます。そのためみんなにもっと学校を大切にしてもらいたいと思い、そして気持ち良く9月からの学期を迎えられるよう、夏休みの前日にOIS/SISの生徒全

員で掃除をしました。

今回は、千里国際学園基本方針“5つのリスペクト”の中にあるうちの1つ「環境を大切にする」をそうじの日のテーマとし、本来なら自分達が普段使用しているホームルーム等を掃除してもらっていたのですが、今回はこのテーマに基づき、各学年のホームルームを他の学年に掃除してもらうというやり方を実行しました。もちろん例年どおり、音楽室、体育館や中庭、玄関にいたるまで掃除をしました。あいにく当日の天気は少々悪く、ときには小雨が降ったりもしました。それでも休まず、雨にぬれながらも屋外の掃除をやり続けてくださった皆さん、各教室のいたるところまで掃除をくださったみなさん、本当に有り難うござ

いました。私達も初めての仕事だった為、皆さんにちゃんと情報が伝わらなかったりで、少々ややこしい部分もありましたが、全校生徒や先生方皆さんのおかげで、無事成功しました。

これから1年間、新生徒会執行部のメンバーで新任期が始まりました。辛いことや、楽しいこといっぱいあると思いますができる限りがんばりたいと思います。

それと、前生徒会執行部の方がいていたように、まだまだ生徒達の意見を言う場がない為、私達の代で少しでもそれが実現するように頑張りたいと思います。これから1年、皆さんどうぞよろしくお願いします。

生徒会長としての一年を終えて MS生徒会執行部

諸正義彦

MS生徒会長、中部部3年

僕が生徒会長になってもう(ようやく?)1年が経ちました。そこでこの一年間を振り返ってみることにします。

まずイベントでは、3教室同時上映の“ムービーナイト”(98.12)、カフェテリアで“ダンスパーティー”(99.2)、シアターで3日間連続上映の“ムービーナイト”(99.4)、毎年恒例の学園祭前1週間に行う“不思議ウィーク”(99.5)、そして最後となった“水合戦”(99.6)をしました。イベント以外の事ではまず“意見箱”(98.11)を設置し、その次に“壁新聞”(98.11)を作ってから、中庭にある丸太で作られた机や椅子を修復し、新しく設置(98.12)したりしました。

これらのイベントの中で自分にとって一番インパクトがあったものは今年

の4月に行ったシアターでの“ムービーナイト”でした。中部部生徒会では大規模なイベントは計画、実行できなかった中で一番大きなイベントだったからです。3日間連続でシアターを使い、スクリーンに大きく映し出し、大型のアンプも使って映画館の迫力により近づけられたことができました。それに3日連続でのべ115人が映画を鑑賞し、ほぼ全員が満足してくれたし自分も満足できたイベントでした。

反対にあまり良くなかったなと思ったことは“意見箱”と“壁新聞”です。まず“意見箱”は意見が入らずにゴミが入っていたし、壁新聞は作る人がいなくなってしまい、いつのまにか終わっていました。“意見箱”は設置した場所が悪く、“壁新聞”は途中から作る人がちゃんと決まらなかったのでもううまくできませんでした。

最後に今期の生徒会最後のイベントになった“水合戦”については学校最

後の日(夏休み前日)に行ったため早く帰る人が多く、しかもキャンプ等のミーティングと重なってしまったため、参加者が少なくイベントにはならないと思いました。そしてはじめに予定していた内容でイベントを進行する事ができず、ただ単に水を掛け合うというイベントになりました。そうしている内にだんだんと参加者が増えていき全身水まみれになった人が3、4人でした。みんな子供に返って楽しむことができました。

このような1年でしたが、自分としてはこの1年間を楽しめたので立候補して良かったなと思います。初めは軽い気持ちでどうにかなると思っていたのですが、思っていたより計画し実行することが難しく、多くの先生にお世話になりました。この1年間にお世話になった先生方、本当に有り難うございました。そして次期中部部生徒会に期待します。

学校茶道関西地区大会に参加

松本靖子

茶道部部长、高等部2年

7月25日(日)西宮神社にて裏千家の学校茶道の関西地区大会が行われました。我が校の茶道部もこれに参加致しました。

この大会は、幼稚園児から大学生までの大人で構成されています。その全員が団結してお茶会を進めていくのです。もちろんお手前も半頭もお運びもすべて学生が担当します。私たちは“お運び”という役割を努めました。“お運び”というのは、その字の通り、お客様にお茶やお菓子を“お運び”する仕事です。この仕事ははっきり言ってとても辛かったです。しかし、水屋で支えて下さった先生方や総監修を努められた私たち茶道部の先生などの疲労を考えると、私たちの疲れなんてたかが知れたものだったのだろうなあ、と思います。それにもかかわらず、ずっと笑顔で気丈にお客様に

応される姿を見て、さらに茶道に惹かれました。

再び大会の話に戻りますが、お茶席のあいまの話も少し紹介したいと思います。自分たちの仕事の合間、隣の部屋に設置された体験コーナー、ゲームコーナーというところで、和菓子作りやお茶引き、折り紙、クイズ、浴衣の着付け(写真も)などで十分楽しみました。今回の大会は、こうして慌ただしかったものの、心地よい疲労の中で幕を閉じてゆきました。

また学校茶道は、お茶会だけではなく、その他の色々なイベントを計画します。例えば、去年はお茶会ではなく、お茶碗などを作りに立杭の里まで出かけたりました。(難しいけれど、出来上がったものは見事



(?)でした。)

私は楽しい時には存分に楽しんで、お稽古中などにはピシッと切り変わって真剣になる事の出来る茶道部が大好きです。もし、茶道に興味を持っている方がいらっしゃいましたら、いつでもどこでも気軽に声をかけて下さい。尚、卒業時には家元より終了の証が頂けます。これも私の楽しみの一つです。

English Drama Festival で Special Award 獲得

難波和彦

English Drama Club 顧問、英語科

去る6月26日に第7回 English Drama Festival が、本学園 Theatre にて行われました。大阪近辺で、英語劇に取り組む中学・高校が集まって、英語劇の発表をする企画です。本学園で開催するようになって、4



年目になります。

今年の千里国際学園のだしものは、インドの神話を題材にとった“Moonstone”という大作でした。11年生エミリーシェルトンさんの演出のもとみんな忙しい中、練習時間を作り出し、かなり難しい英語で書かれた台本をがんばっておぼえました。年々参加校のレベルが上がる中、千里国際学園 English Drama Club は健闘し、Special Award を獲得しました。

今生徒たちは、新しく部長になった中等部3年生の堀桃子さんのもと来年の大会にむけて、早くも準備を



はじめています。

参加校/千里国際学園中等部・高等部、長野高校、忠岡中学、貝塚第三中学、貝塚第五中学、千里高校
グランプリ/千里高校

タッチ・クラブ ジャパン・カップに出場！

岡田憲志

タッチクラブコーチ、保健体育科

さる9月4日、5日に、奈良県橿原市でレクリエーション大会がおこなわれ、その一環としてタッチの第9回ジャパン・カップが開催されました。今回は、ミックスド（男女混合）クラスだけではなく、初めてメンズ（男子のみ）とウイメンズ（女子のみ）のクラスにも出場しました。

というのも、最近タッチの人気はうなぎ登り（ほら、よくフィールドで練習しているでしょ?!）。メンバーも約40人を数えています。中学生、高校生の男女ともがプレーできるのが、その秘密かもしれません。

4日におこなわれたミックスドの試合には、ハイマー先生を含めたほぼウチのベスト・メンバーで試合に望みました。しかしながら、スーパーモンキーズや日体大というお馴染みの強豪とは、まだまだ実力に差があり、2連敗を喫しました。最後の試合の相手は、日本福祉大学。この大学生を相手に大善戦し、3対1で見事勝利をものにしました。

翌5日のウイメンズ。メンバーの半数近くはまだまだ初心者という状態にもかかわらず、2試合目の愛知淑徳大に1対0で初勝利を収めました。すばらしい！ 3試合目の関西外国語大学に対しても、とてもいいゲームをしたのですが、0対1で負けてしまい、結果は1勝2敗でした。

同じく5日のメンズ戦。メンズの試合は、とにかくレベルが高い！ しかも、ほとんどのチームが社会人が大学生。中学・高校生でチームを作っているのは、わがセイバーズだけでしょう。初戦の相手は、前回の関西大会で2位だった名古屋経済大学。この強豪相手に大健闘。3対1で敗れはしましたが、十分に対等に



戦えるということを証明しました。

2戦目、かつ、最終戦の相手は狛江タッチ・クラブ。東京の社会人チームです。このメンバーの中にはハイマー先生よりもでかい外国人が3人もいて、コンタクトの無いはずのタッチでも、吹っ飛ばされるほどのいかつさでした。それでも、このチームを相手に、対等な試合運び。ウチが同点とした直後、その間隙をつかれて相手に得点を許し、2対1で負けはしましたが、本当にいい試合でした。

すっかり、関西地区の中堅チームとして定着しつつあるセイバーズ。現在は12月までの休部中ですが、また、12月から2月の関西大会に向けて再始動です。この関西大会は、来年の全国大会への予選をかねていますので、非常に重要です。新規メンバーも募集しますので、ぜひ、参加してください。

千里国際学園のチームスポーツは千里国際学園中等部・高等部（SIS）と大阪インターナショナルスクール(OIS)の2校で1チームを編成しており、この形態での参加を認めるAPAC(Asia Pacific Activities Conference)の公式試合や、近隣のインターナショナルスクール、日本の中学・高校との交流試合等に参加しています。

< APAC参加校 >

北京インターナショナルスクール（中国）、上海インターナショナルスクール（中国）、ブレントインターナショナルスクール（フィリピン）、ソウルフォーリンスクール（韓国）、カナディアンアカデミー（神戸）、千里国際学園（大阪）

（注）「大阪セイバーズ(The Osaka Sabers)」は千里国際学園スポーツチームの愛称です。

吹田市長杯トライアスロン大会で2名優勝

馬場博史

トライアスロンクラブ顧問、数学科

9月5日(日)に千里北公園で開催された恒例の吹田市長杯トライアスロン大会に、今年も本学園から16名が出場しました。

中学生は、プールで水泳500m、自転車は固定式ローラー台で10km、ランは公園内道路を4.2km。高校生以上は、水泳1000m、自転車20km、ラン7kmで争われました。

今年も生徒からの希望があり、夏休み中の8月19日から週3回3種目ずつ学園で練習。学生の佐藤直仁コーチの協力の下、この大会に備えてきました。

結果は中学生5名、教員3名が入賞。コーチも一般男子で入賞。中学2年の菅野あずみさんは水泳で出遅れたものの、自転車で逆転してそのまま逃げきり、初優勝を果たしました。ま

た、Searle先生と私(馬場)も最後のランニングで大逆転し、ワンツーフイニッシュしました。

全員が無事に楽しく完走できて、とても満足しています。応援に来てくださった御家族、同級生、教職員の皆さんありがとうございました。

なお、中等部の生徒4名が、9月18日放送のみのおFM「スポーツコネクション」で、練習や大会の様子を語りました。

<入賞>

中学女子の部1位菅野あずみ(中2)2位長みさき(中3)3位松田杏子(中2)/中学男子の部2位藤本卓(中2)3位岡本竜平(中2)/一般



男子の部3位佐藤直仁(コーチ)/一般女子の部3位石田純子(教員)/壮年男子の部1位John Searle(教員)2位馬場博史(教員)

<他の完走者>

小島聖子(中1)山田蘭子、安藤ゆかり(中2)生野利典(中3)入山慎一(高1)金野紗己、妙中友香(高3)

ホストファミリー募集

マーク・ピーキン

アスレチック・ディレクター

スポーツシーズンはすでに始まり、バレーボール、野球、テニスの選手は通常の練習を行っています。今シーズン最初のAPACのイベントは韓国で行われるバレーボールと神戸で行われるテニス・トーナメントです。このイベントに向けて、各チームとも一生懸命練習しています。

千里国際学園は、2000年4月13日(木)~15日(土)に開かれるAPAC男子サッカー・トーナメントの主催校になります。従いまして80名の選手とコーチを4泊(水曜日から土曜日)にホームステイさせてあげる家庭を当校から探さなければなりません。そこで皆様にご協力をお願いしたいのですが、他校から参加するAPAC選手のため、ホストファミリーになって頂けませんかでしょうか。

ホストファミリーの役割は次の通りです。

- *水曜日の午後、学校までゲストを迎えに行く。
- *ゲストの夕食を1~2回用意する。(チームのスケジュールによるので今のところ未定)
- *寝る場所を提供する。(布団、ベッド、あるいは床にマットを敷く。)
- *毎朝、朝食を用意する。(洋食が好ましい。フルーツ、コーンフレーク、トースト、ジュース等でもよい。)
- *ゲストを毎朝、学校のすぐ近くのサッカーグラウンドに連れて行く。(バス停への行き方を教えるか、車で連れて行く。)
- *日曜日の朝、開空行きのバスに乗せるため、ゲストを学校に連れて行く。

APACのホストファミリーになって頂ける方は、インフォメーション・センターまでご連絡下さい。お申し出頂いたご家庭の名簿を作成し、後日、詳細をお知らせします。

トーナメントに関して質問のある方、あるいはホームステイは無理でも何かお手伝いして頂ける方もご連絡お願いします。

<from OIS "Educator">

Welcome Back to School!

StepheMiddlebrook

OIS Headmaster

I wish you all a happy beginning to the school year. We were very sad to see so many people move away from our school last spring, but the happy news is that many, many new families arrived this summer, far more than we expected at the end of June. We expect probably the largest number of students since the school began, well over 250. I know our parent community joins me in wishing you a smooth start in your new school.

New Teachers

I am pleased to announce the hiring of Ms. Madeline Hanks as a new Science and Math teacher from Tumut, NSW, Australia. She has been teaching middle school/high school science and math at a Catholic school in this small, mountain town about four hours from Sydney. She is a graduate of Avondale College with a degree in Biological Sciences, Chemistry and Mathematics. During her four years experience at McAuley Catholic Central School, she has taught year 7-10 maths, earth science, physics, and chemistry. For the last two years, she was department coordinator. She is also a graduate of a prestigious girls' boarding school in Sydney, and she has traveled widely in Asia. She will be teaching grades 8 and 9 mathematics, and grade 8 Earth Science.

We were also delighted to meet and hire Ms. Shino Kasugai as a part-time Japanese language teacher. Ms. Kasugai has most recently been studying and working in New England. She has just finished coursework and

research for her Master's in TESOL at the School for International Training in Brattleboro, VT, and will receive her bilingual teaching certificate from the State of Vermont. She also holds a degree from Ochanomizu University in Tokyo in dance and dance education. In addition, she has done extensive training in the Japanese Language Exchange Program in Chicago and Indiana, where Hara-sensei from our Japanese Department also did some of his training. She also completed several hundred hours in Japanese language education in the Inter-cultural Institute of Japanese in Tokyo. Her home in Japan is in Chiba, so she is new to this area. She has taught elementary, middle school, high school, and adult students in Japan, South Carolina, Massachusetts, and Maine. I interviewed Ms. Kasugai at O'Hare Airport in Chicago on July 5, and we felt very fortunate to have found her so far from our school.

Those of you who were here last year will remember that Ms. Miriam Factora will be taking a two-year leave of absence to do research for her doctorate at the University of Queensland, Australia. Ms. Factora worked hard on her research this summer in southern Mindanao in predominantly Muslim areas and she collected over 400 folk songs for her project to create a Kodaly-based music curriculum using Philippine folk and ethnic materials. Her replacement for the two years of her leave will be Ms. Heather McLaughlin, a music teacher from suburban Melbourne, Australia. Ms. McLaughlin has a B.A. from

Melbourne University and a Bachelor of Music from Sydney University, a M.Ed. from La Trobe University, a Licentiate Diploma from Trinity College London in violin, and two Diplomas in teaching from Australian universities. In addition, she has studied music pedagogy at the Kodaly Institute in Hungary and the Orff Institute in Salzburg, Austria. She has been president of the Orff Society of Australia, has run her own consultancy business, builds Orff marimbas with community and school groups as a way to involve parents and children together in music education, and has taught primary and upper school music. She has also spoken and presented all over Australia and in other parts of the world on Orff and Kodaly music pedagogy, including all family members in music education, and marimba building. Her husband, John Secomb, who will accompany her is the chair of a high school music department in Melbourne and is a professional violinist/violist. Their children, Kathryn and Robert will also join our school in the 12th and 5th grades respectively.

A Happy Return

We are happy to welcome back Ms. Amanda Pekinto our PE department. She will once again teach elementary and middle school PE this year and has been on maternity leave for a year. Welcome back Mandy!

University Acceptance

Ms. Wagner has listed below the colleges and universities which have

accepted members of our graduating class last year. Several parents of younger children have expressed interest in hearing where our students go after graduation. One thing I wanted to mention today is that as a school we do not look upon such a list as evidence of our competitive success with other international schools. The selection of colleges is an individual choice for each family and student. We do not consider in our counseling process the notion that where a student applies and chooses to go may reflect honor and glory on the school. Our students, as evidenced by the list

below, indeed go to good and challenging schools. We have sent students to Oxford and Harvard and Duke and Columbia and the Sorbonne and excellent, prestigious institutions in other countries in prior years, and of course we are very proud of these students and their accomplishments. But as a small school with only a handful of graduates every year, we do not feel it important to rank our students amongst themselves, nor do we feel it important to make a huge public display of their successes in choosing colleges. In fact, what I think most important is that students leave

here with an excellent education, prepared for the next challenges with confidence and grace. Ivy League and Oxbridge universities are fine, but they are not the best yardsticks for measuring the worth of small schools like ours. I wish our graduated seniors well in the next stage of their life's journey. They are a remarkable group of young adults and I look forward to hearing about their challenges and successes for many years to come.

MS/HS Update

Juli Wagner

OIS Middle and High School Principal

Greetings to all in the opening of the 1999-2000 school year. We particularly welcome seventeen new students who come from France, England, Singapore, Pakistan, the Philippines, and the United States. We know that we will profit much from what they will bring to our international school and we wish the same for them.

This is the first term of our new joint schedule and, although there were a few problems to work through, it is now up and running. Steve Lewis has spent countless hours computerizing our two schools' scheduling system. That has helped all of us receive better information and also to manipulate it better. I am extremely grateful that we have Steve's talents in this school. One of the by-products of our new schedule is that students will have a different schedule for each term. That adds complexity but also variety to the year, which I think we will all enjoy.

On September 14th, the middle and high schools of both OIS and SIS had their Back to School Night for parents. The evening began for OIS parents at 6 PM in the theatre. At this time the shared programs gave presentations for both SIS and OIS parents. Following these presentations there were additional presentations by all OIS departments. Teachers were introduced and an overview of each subject area was given. I hope this has given you a perspective of the entire OIS curriculum from grades 6 through 12. In listening to parents' concerns this past spring, we realized there was a lack of information about our program which we hope this format has addressed. If you feel you need more detailed information, you are always free to contact teachers at school.

Graduated Seniors

Because we are so small, we get to

know all of our students very well. Graduated seniors were, without exception, a fine group of young adults. They accepted the challenge of a rigorous education and did well. They accepted the challenge of a major service activity and have come home committed to service for their lives. Although their backgrounds

千里国際学園中等部・高等部(SIS)ではこの広報誌"インターカルチャ"が発行されていますが、併設の大阪インターナショナルスクール(OIS)では毎週金曜日に"Educator"が発行されています。

このページでは"Educator"の記事の中で、OISの様子がよく分かるものやSISと関連する話題等をセレクトして掲載しています。

were varied, they represent in our enrollment influence from Spain, France, the United Kingdom, Taiwan, Germany, the United States, Canada, and Japan. We couldn't be more proud of them and are grateful for their many contributions to this school.

These young people have also been accepted at a number of fine universities. They are as follows: Boston University, George Washington University, University of Washington, University of San

Francisco, Tufts University, *New York University, *Oregon University of Oregon, Dominican College of San Rafael, Brigham Young University, Washington University in St. Louis, *Barnard College, Oberlin College, American University, *Haverford College, Swarthmore College, Bates College, Boston Berklee College of Music, *University of Virginia, *Pennsylvania State University, Purdue University, International Christian University, *Union University, *St.

Mary's College of Moraga, *Bryn Mawr College. The asterisk indicates the universities chosen to attend. In addition, students have conditional acceptances at the following universities: University of Southampton, University College London, University of Navarra, and University of Manchester. Congratulations, seniors, and best of luck in the future.

Elementary Update

Kari Caffin

OIS Elementary School Principal

Welcome to all students and parents for the 1999/2000 school year. A special welcome to all the new families to OIS. The teachers and I have been extremely pleased with the beginning of this school year. The students have all settled into classes quickly and happily, and all seem pleased to be back at school.

I would like to take this opportunity to remind and encourage you to keep in contact with your child's teacher(s). Please use the home-school notebooks, back and forth books or assignment notebooks to communicate with the teachers or to find out what is happening in the classrooms. Also, use the school calendar to keep track of planned events. *The Educator* comes out every Friday, so look out for it in your child's bag.

News from the classrooms:

Over the summer the ECP classroom was modified to create an improved learning environment, and the teachers have both done a great job of getting it set up for the

beginning of classes. We are grateful for the help given by some parents in setting up, washing cubbies and toys the day before school began. Please call in and have a look at the new teaching spaces. ECP students are learning school routines, and the five year olds are being very helpful with the newest students.

Grades 1 and 2 are learning about "Myself and my family"; as well as finding out about classroom routines. The first graders are settling into the new routines quite quickly.

Grades 3 and 4 are learning how to make connections between books they read and real life. They are also exploring what 'community' means. Fifth grade is focusing on Study Skills, and how proper study skills will help them with the increased workload expected in grade 5.

All classes have been revising the 6 Rules, Communication, Movement, Safety, Problem Solving, Learning and Treatment.

In one teacher's classroom, is a quote that I would like to share with

you. "Attitude is a little thing that makes a big difference". Ask your child if it is in their classroom.

A Message

Gregory Watt

Head Librarian

Let me introduce myself. My name is Greg Watt, and I am the new head librarian at SIS/OIS. I am a West Australian who has spent the last two years as a librarian on Christmas Island (very close to Indonesia) and thirteen previous to that in Australian schools as a librarian, teacher of computing, science and English/Theatre Arts.

We have an exciting and interesting year ahead of us in the library and our primary focus will be on offering the best possible library services in a motivational environment. I see the library as being a special place where all members of the school community can feel comfortable and have access to the widest range of resources. We will be actively promoting a friendly library atmosphere where students will be encouraged and educated in appropriate use of the library, and faculty, parents, and community members will always be welcome.

I have examined our existing resources and, like any library, there is room for development. We will continue to develop an

appropriate collection that supports the needs of the school and this is where your comments and suggestions will be most welcome.

The automation of the library has been an ongoing saga that is being dealt with now. You may remember last term our library's servers suffered a fatal electric surge after a nearby lightning strike. The English side of the library then had to shift to a slower, manual system and we had temporarily no way to search for books using an index or catalog. I have evaluated and tested a range of library software during the spring and summer and have shortlisted the most appropriate systems. The final choice of a new automated library system will relate to what the system offers for the future. It would be a pointless exercise to find a system that just "fills the gap." We expect our new system to be operational in October.

The library, of course, will offer the full range of educational opportunities for students at SIS/OIS where we will promote a love for reading and literature, develop information and independent learning skills, and encourage the use of technology tools.

We will be holding a number of library events, displays, and activities over the school year. We encourage your participation on any level. These events will be publicized well in advance.

Finally, I would like to invite you to discuss these or any other library matters, informally or formally, throughout the school year, with them. I look forward to meeting you!



THE BOOKSTORE NEWS

October 1999



みなさん、読書の秋です。ブックストアでは、関西一週間などの雑誌から話題の新書までそろえてみなさんのお越しをお待ちしています。お気軽にお立ち寄り下さい。

保護者会だより

【第2回定例会報告】

6月3日(木)

6月3日午前11時より会議室にて、第2回定例会が開かれました。

(1) 執行部からの報告

保護者会の意見箱を設置(正面玄関)。

(2) フォーラム委員会からの報告

6月4日(金)「ダッタ先生を囲んで」講演会を14:00~15:00 3階会議室にて開催。

(3) ネットワーク委員会からの報告

5月地域別名簿の作成。発送完了。

(4) 広報委員会からの報告

10月号からインタビュー中心の新企画を予定。

(5) インターナショナルフェア委員会からの報告

6月 クラフト制作

(6) 各学年委員からの報告

中1 6月2日 生活科学室にて
学年親睦会

中2 6月4日 学年親睦会 カ
フェテリアにて

中3 6月 クラスごとに親睦会
高1 5月30日 千里中央公園内

炊さん場にて親子の親睦会

高2 検討中

高3 謝恩会を予定

【第3回定例会報告】

9月2日(木)

9月2日午前11時より会議室にて、第3回定例会が開かれました。

~大迫校長先生より~

夏休み中に先生方の異動がありました。詳しくはインターカルチャをご覧ください。

(1) 執行部からの報告

学校や保護者会へのご意見があればお知らせ下さい。

(2) フォーラム委員会からの報告

10月12日(火)ソプラノ、テノールデュオコンサートへのお誘い。

(3) ネットワーク委員会からの報告
春学期にした地域のミーティングの報告。

(4) ボランティア委員会からの報告

スポーツバンケットにてサンドイッチ180人分、高等部春期コンサートにてティーサービスをしました。

(5) 広報委員会からの報告

インターカルチャ10月号作成中。インターカルチャ11月号の準備。

(6) インターナショナルフェア委員会からの報告

引き続きクラフト制作を行っています。

フォーラム委員会主催 コンサートのお誘い

ソプラノ、テノールによるデュオコンサートを開催します。豪華で楽しいひとときになるとと思いますので、どうぞ皆様お誘い合わせてお出かけ下さい。

世界の名歌とイタリアオペラ・ハイライト

<日時> 1999年10月12日(火) 3:45pm ~ 5:00pm

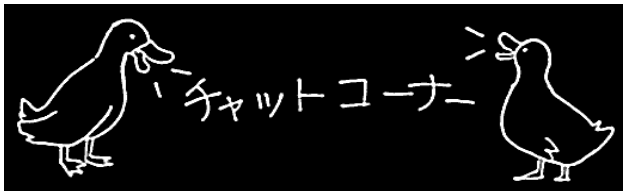
<場所> 千里国際学園シアター

<出演> ソプラノ 斉藤(安田)言子 神戸女学院大学教授 関西二期会
テノール 山本裕之 神戸親和女子大学助教授 関西歌劇団
ピアノ 橋野豊子 大阪音楽大学非常勤講師

<プログラム> メンデルスゾーン作曲 「歌の翼に」

ナポリ民謡 「帰れソレントへ」

プッチーニ作曲 オペラ「ラ・ボエーム」より第一幕



< SISサッカー部我が町へようこそ >

去る5月8日土曜日、SISサッカーチームと我が町の市立苦楽園中サッカーチームの親善試合がありました。数々の不運もあり、試合結果は5-0と惜敗でした。が本当にありがとうございます！苦楽園中は夙川駅より優に6kmはあり、しかも素晴らしい眺めの広がる高地にあります。SIS選手の多くは知らぬ事とは言え、五月晴れの中を不慣れな道をプロムナードし登って来てくれました（遠いのですよ）。観戦者も多く（校舎の上の方からたくさんの首が伸びていたのをご存じ？）、結果はともかく熱戦でした。試合後、SISチームは皆帰途に着こうとする時、突然、苦楽園中チームは再び我がチームの前に整列、「ありがとうございます！」「俺達もやろうぜ！」の誰かの掛け声に（我が子でない）、「ありがとうございます！」。なかなかのリーダーシップ！最後に、苦楽中チームのエース9番の「またいつでも申し込んでくれていいから。」と、シャイな彼の皆さんへの感謝の気持ちを伝えます。ありがとうございます！また来てください私達の町へ。

（9年生 畑 真理）

みなさんもこの"チャットコーナー"にどしどし投稿して見ませんか。日々の暮らしのこと、旅のこと、最近出会ったいい話、こわい話など何でも結構です。広報委員か、インフォメーションセンター横の投稿ボックスまでどうぞ。

< 「合格」をありがとう！ >

2月4日の郵送が待ち切れなくて、郵便局にとりに行きました。そして開けると「合格」やったあ！娘より誰より、私が一番嬉しかったと思います。私がここの学校の生徒になりたかった。だから私は普段働いているけれど時間のあるときはこの学校に通おうと（何をしに？授業をうけさせていただけませんか？）思いました。

先生方、大勢の優秀な子供達の中から娘を選んで下さって本当にありがとうございます。娘にも、この気持ちを忘れずに、又、面接の時に言ったこと、サッカー部に入って頑張ること、英語を頑張ることは必ず守りなさいと言っています。私は自分が英語が好きなので、この環境にいればどんなに英語が勉強できるか！うらやましいかぎりです。だからどうかここでお世話になる6年の間の、できるだけ早い時期に、英語の楽しさ（10億の人と話せるんですね）を見つけ、環境をフルに活用して欲しいと思っています。でも押しつけて嫌いになると困るので難しいですね。また、Course Descriptionsには楽しそうな授業がいっぱいで、例えば「ヒンズー教」など教えてくれる高校が他に日本のどこにありますでしょうか？私も授業が受けたいです。異文化を知ることは楽しいですよ！

また、長い夏休みの有意義な過ごし方、いいアイデアのある人は教えてください！

（7年生保護者 N.M.）

< 誰か故郷を思わざる >

テレビの天気予報を見る度に、地元の大阪のそれではなく故郷のをまず確認して、「ああ、今頃は雪が降っているのか」などとひとしきり思うのが、いつしか癖になってしまった。昔は故里など歯牙にもかけなかったものだ。なにぶん松本清張「砂の器」では、東北地方とともにズーズー弁の話される地域だと言われているし、マスコミも「裏日本」などと言っていたからつい気後れして。

ところが近年無闇と故里が懐かしく感じられるようになった。一つは、歳をとって里心がついたせいかもしれない。しかし、より大きな理由として、明治の外国人、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン＜ヘルン＞）が、流麗な文章で故里を描き、「神々の国の首都」と称えたのを読んだのだからであろう。一外国人によって、今まで見えなかったものに開眼し、故里を再認識させられたのであった。かつ故里を誇らしく思うようになったのである。

「男はつらいよ」の寅さんは「俺はもう絶対柴又には帰らねえよ」と言いながら最後にはヘナヘナと帰っていく。僕もいつかは寅さんのように故里の内懷に回帰していくことになるのだろうか。

（K.N.）



チャットコーナーカット保護者会広報委員

保護者会広報委員新特集「SISのぞき見探検隊」

校内のさまざまな施設を皆様にもっと知っていただこうと、校内を回ってインタビューする新特集、名付けて「SISのぞき見探検隊」に、今年度はチャレンジいたします。

～カフェテリアをのぞいてみました～

天高く馬肥ゆる秋！

育ち盛りの食欲旺盛な中高生の親としては、子供達の昼食にも気を使っていますね。そこでのぞき見探検隊では、子供達がお世話になっているカフェテリアを訪問して、チーフの久保さんにお話を伺って来ました。

カフェテリアが開いている時間帯とスタッフの人数を教えてください

・開いているのは、10:30am～1:30pmです。他に寮生のために朝食と夕食を作っています。
・スタッフは9名です。

1日に何食位の利用がありますか
・現在平均300食ぐらいです。1日に350食ぐらいの利用があると、経済的にも安定し、料理内容のより一層の充実がはかれますので、皆さんぜひご利用ください。

メニューにはどんなものがありますか(定番メニュー)

・日替わりランチ(3種類)、スパゲティ、弁当、ピザ、カレー、サラダ、うどんそば類、長崎ちゃんぽん、ラーメン
・他にも日替わりで、オムライス、グラタン、カツ類、から揚げ、サンドイッチ、デザート類などいろいろなメニューを作っています。

調理で工夫、苦心されている点は？

・日替わりメニューの内容は、同じものが繰り返されないようにいつも頭をひねっています。(同じものが出るのは年に数回だそうです)

・冷凍食品を使わず、栄養のバランスを考えて、野菜を多くとり入れるようにしています。

・日替わりランチは、内容と量を学

年別に設定して作っています。例えばAランチは高学年向き、Bランチは中学生向き、Cランチは低学年向きというふうに。

人気メニュー、不人気メニューは？

・洋食が人気、特に揚げ物やトマトベースのものですね。人気のないのは魚料理、特に骨のついた魚は絶対ダメです。全般に野菜嫌いの子が多いようです。

この学園の生徒の印象は？

・思ったことをストレートに表現できて、YES、NOがはっきりしているので理解しやすい反面、自己主張が強すぎて、がまんや待つことのできない子が結構います。

・カフェテリア内の食器の片付けのマナーは良いけれど、売店前のロビーにお菓子の袋や空き缶を散らかすマナーの悪い子もいます。

・いろいろな子がいますが、毎日顔を見てみると、わが子のようにかわいいですね。

カフェテリアから保護者・生徒にお知らせ等がありましたらどうぞ

・98年9月から1年間、誕生日にランチ無料サービスを実施して好評を得ました。引き続き実施したいのですが予算的に難しいので、サービス継続のためにも、皆さんカフェテリアをもっとご利用ください！

お忙しい中、快くインタビューに応じてくださった久保さん、どうもありがとうございました。スタッフの皆さん、これからもおいしいランチを子供達のために作って下さいますよう、よろしく願いいたします。

(広報委員 蔣 文子)

～トレーニングルームを知っていますか？～

たくさんのマシーン！まさに筋力アップ教室です。責任者の岡田憲志先生にお尋ねしました。

どのような機械がありますか

レッグ・プレス、ヒップ・アダクション、ローワー・バックなど8種類のマシーンがあります。

いつ使用できますか

・授業の時
・メイクアップの時(体育の授業を休んだ時、30分間授業のかわりに運動する)

・クラブ(トライアスロン)

・自由に使える場合(ハイスクールのウェイトトレーニングの授業を終了した人。理論、使い方、安全性について習い、メニューを作っていく)

使っている人に感想を聞きました

・部分的に筋力アップできて良い。
・自分でメニューが作れるので面白い。

スポーツの秋、みなさんおおいにシェイプアップしてください！

(広報委員 金野友俐)

インターナショナルフェア委員会から

11月27日（土）にインターナショナルフェアが開催されます

♪ 出店のお願い ♪

中華料理店、韓国料理店、日本料理店（焼き鳥、おでん等）、お花、民芸品、クッキー、ケーキなどを出店してくださる方を募集いたします。

各ネットワーク、学年、学級、個人などでインターナショナルフェアに出店ご協力していただけますか？

出店していただける方（代表者）は下記のインターナショナルフェア委員にFAXまたは電話にて申し込みをお願いいたします。

藤田	06 - 6856 - 1515 (TEL & FAX)
鷲尾	0727 - 27 - 3522 (TEL & FAX)
秦	0722 - 64 - 4738 (FAX 4739)
阿部	0726 - 95 - 8261 (TEL & FAX)

♪ エンターティメント参加募集 ♪

今年も皆様方からエンターティメントへの参加を募集いたします。楽器演奏、コーラス、バンド演奏、ジャズダンス、落語など各種ジャンルでの披露をお待ちしております。どしどしお申し込みくださいますようお願いしております。

参加ご希望の方は下記の委員までご連絡ください。

マラン	077 - 529 - 0576
今田	0727 - 27 - 7937
阿部	0726 - 95 - 8261

♪ 景品のご寄付のお願い ♪

ラッフル オークション ピンゴゲーム への景品のご寄付をお願いいたします。

海外でお求めになって、必要でなくなった品など大歓迎！！

その他、レストランの食事券・ビール券・商品券・袖を通していないドレス・子供服・コンサート、演劇、スポーツ、遊園地のチケット・ホテル宿泊券・日用品（石鹸、タオル、食器のセット、）・インテリア品・おもちゃなど、クラフト製作日に保護者会室に委員が居りますので、お持ちください。また、貴重品、金品に関するご寄付は委員までご連絡ください。

♪ クラフトスケジュールのお知らせ ♪

9月よりクラフト製作を行っています。雑談しながら楽しいひとときを過ごしましょう。ぜひお越しください。

10月の予定

5日（火）7日（木）13日（水）15日（金）19日（火）21日（木）25日（月）27日（水）29日（金）

時間 10：30AM - 3：30PM（この時間帯でいつでも結構です）

場所 保護者会室

クラフト製作は、暴風警報などで学校が休校の場合は中止いたします。また、どの設定日にもいろいろなクラフト製作の用意をしておりますので、好きなジャンルにご参加いただけます。

10～11月行事予定

月 日 曜	
10 02 土	運動会
11 月	振替休日(休校)
15 金	学校説明会
19 火	玄関コンサート(22日まで)
25 月	イヤーブック個人写真撮影(26日まで)
11 03 水	文化の日(休校)
11 木	オールスクールプロダクション(13日まで)
23 火	勤労感謝の日(休校)
24 水	編入選考
27 土	インターナショナルフェア
29 月	秋学期終了
30 火	冬学期開始

学校説明会のご案内

10月15日(金)

13:30～15:30

本校に興味を持たれている方にお知らせ下さい。校内施設見学、個別相談も行います。事前申し込みは必要ありません。お問い合わせは下記まで。

入学センター TEL 0727-27-5070

編集後記

今年もオーストラリアホームステイ、サマーキャンプ、海外研修など、夏休み中の活動報告が豊富でした。ごゆっくりお読みください。私も報告を一つ。この夏に出場した海外でのトライアスロン完走記が、月刊雑誌「トライアスロンJAPAN」10月号P.92に掲載されました。機会がありましたら一度ご覧ください。本学園図書館にも置いてあります。

インターカルチャーへの記事、短信、感想など、E-mailでhbaba@senri.ed.jp(@sisf.minoh.osaka.jpでも可)までお送り下さい。バックナンバーの抜粋も本学園ホームページでご覧いただけます。

URL <http://www.senri.ed.jp/>

編集：馬場博史(数学科) 保護者会だより記事：保護者会広報委員 カット：イラストレーションクラブ生徒

Edited by Hiroshi Baba(Math.) Cooperation of the Public Information Committee of SIS Parents Association Drawn by the students of Illustration Club

Senri International School Foundation (SISF)

Senri International School (SIS)

Osaka International School (OIS)

4-4-16, Onohara-Nish, Minoh-shi, Osaka 562-0032, JAPAN
TEL 0727-27-5050 FAX 0727-27-5055

学校法人千里国際学園(SISF)

千里国際学園中等部・高等部(SIS)

大阪インターナショナルスクール(OIS)

〒562-0032 大阪府箕面市小野原西4丁目4番16号
電話0727-27-5050 FAX 0727-27-5055

年間発行予定と主な内容 ()は発行時期

5月号(上旬) 卒業式、入学式、大学等合格状況、APAC

6月号(中旬) 学園祭、スポーツ表彰式

10月号(上旬) 夏の宿泊行事、夏の諸活動報告

11月号(中旬) 運動会、APAC、玄関コンサート

2月号(上旬) オールスクールプロダクション

3月号(中旬) APAC、入試結果、卒業生へ贈る言葉

[注] "APAC" はスポーツ公式試合

千里国際学園は、帰国生徒を中心に一般日本人生徒や日本の教育を希望する外国人生徒も受け入れて日本の普通教育を行う千里国際学園中等部・高等部 Senri International School (SIS) と、4歳から18歳までの主に外国人児童生徒を対象とする大阪インターナショナルスクール Osaka International School (OIS) とを、同一敷地・校舎内に併設しています。

両校は一部の授業や学校行事・クラブ活動・生徒会活動等を合同で行っています。チームスポーツはこの2校で1チームを編成しており、この形態での参加を認めるAPAC(Asia Pacific Activities Conference)の公式試合や、近隣のインターナショナルスクール、日本の中学・高校との交流試合等に参加しています。このため、校内ではインターナショナルスクールの学校系統に合わせて、6年生～8年生(日本の小学6年生～中学3年生春学期)をミドルスクール(MS)、9年生～12年生(日本の中学3年生秋学期～高校3年生)をハイスクール(HS)と呼んでいます。